

29209
To 45



始



外 920
之

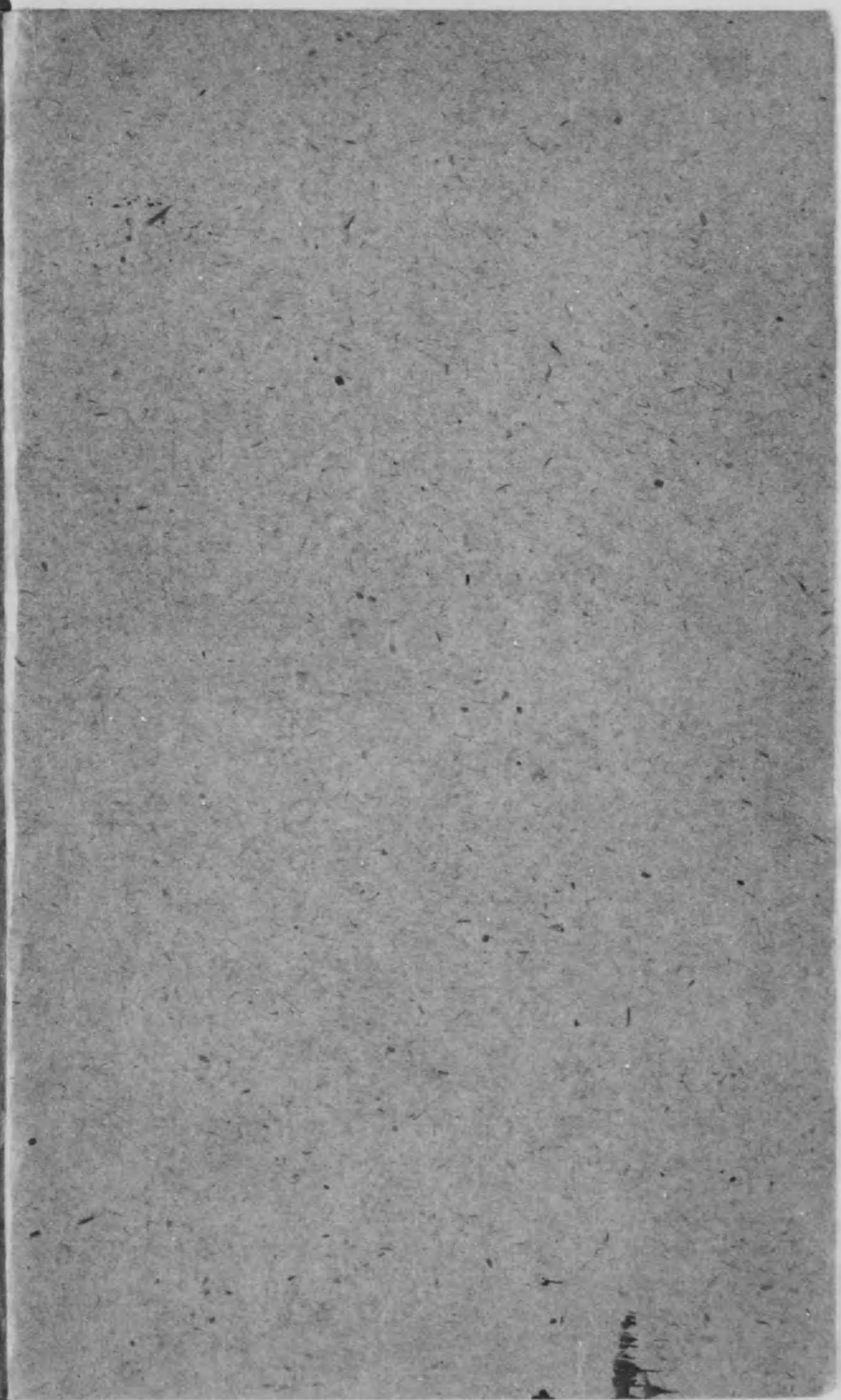
376-1161



292.09
T645

支那漫遊記

大正
7. 6. 29
内交





大谷光瑞閣下

平昔の厚誼を懐ひ、且つ現時の
境遇に對し、微忱を表せんが爲
めに、恭しく此書を

大谷光瑞閣下
に獻ず

著
者

陳言一則

予上海に於て、支那新聞記者諸君より招待せらるゝや。諸君に諭げて曰く、世界に於ける最も先輩たり、最も偉大に、而して且つ理想的なる新聞記者は、貴國の孔夫子也。其の春秋を作りて、事實を直書し、自から褒貶を、其中に寓するもの、是豈に吾人操觚者の標準にあらずや。凡そ貴國には、物として存せざるはなし。但だ自から之を、新たにするを、勗めざるのみと。是れ決して一時の坐興にあらず、予は深く此の如く信ずるもの也。予が支那を觀察する、概ね此の要義を實際に

就て、演繹したるに過ぎず。

未だ知らず此の一書が、果して如何なる刺戟を、支那人士に與ふ可き乎。但だ本書の内容が、逐次『國民新聞』に掲録せらるゝや、支那新聞の之を譯載したるもの、一二にして足らず。諸君若し其言の非禮なるを咎めん乎、希くは吾人が唯だ事實と信ずる所を、直書したるものとして、之を容恕せよ。如何に其言は露骨、痛切なるも、吾人の支那及び支那人士に對する、深甚多大の同情其物が、其の根本思想たることを識認せよ。而して我が邦人も亦た、吾人が支那僻に向て、若干の尋酌を與ふる所あれ。蓋し支那問題を解釋するの

管鍵は、單に乾燥なる智識のみならず、又た眞摯なる同情に俟たざる可らざれば也。

大正七年五月初七

國民新聞編輯局に於て

蘇 峰 學 人

例言

本書を分て二部と爲す。『禹域鴻爪録』は、予が大正六年九月乃至十二月に互れる行程を、其日々に記したるものを、殆ど全く其儘に採録したる也。『遊支偶録』は、予が旅行中の感想を、歸朝後追記したる也。

明治三十九年五月—八月の交、予の支那に遊ぶや、『七十八日遊記』の著あり。讀者若し此書と参照せば、思半ばに過ぐるものあらむ。

書中の遊歴地圖は、玉生武四郎君の製する所、書中の寫眞は、悉く山崎猛君の撮る所。兩君は予が漫遊中の伴侶として、此の旅行を有益、且つ愉快ならしむるに於て、寄與する所最も多し。

此遊、在支那の我が官民、舊新知友諸君、及び支那朝野の諸君に負ふ所、逐一枚舉に違あらず。特に十二年前の舊知と、再び相會したるの愉快は勿論、意中の友と、意外の地にて相見たるが如き、亦た旅行中の佳興

たらずんばあらず。茲に諸君の芳名を特記せざるは、其の繁に勝へざれば也。

本書の編纂は、並木仙太郎君之に任じ、校正には草野茂松君、装釘には平福百穂書伯、印刷には渡邊爲藏君を煩はせり。聊か此に謝意を表すと云爾。

大正七年五月初七 國民新聞編輯局に於て

蘇 峰 學 人

録

外

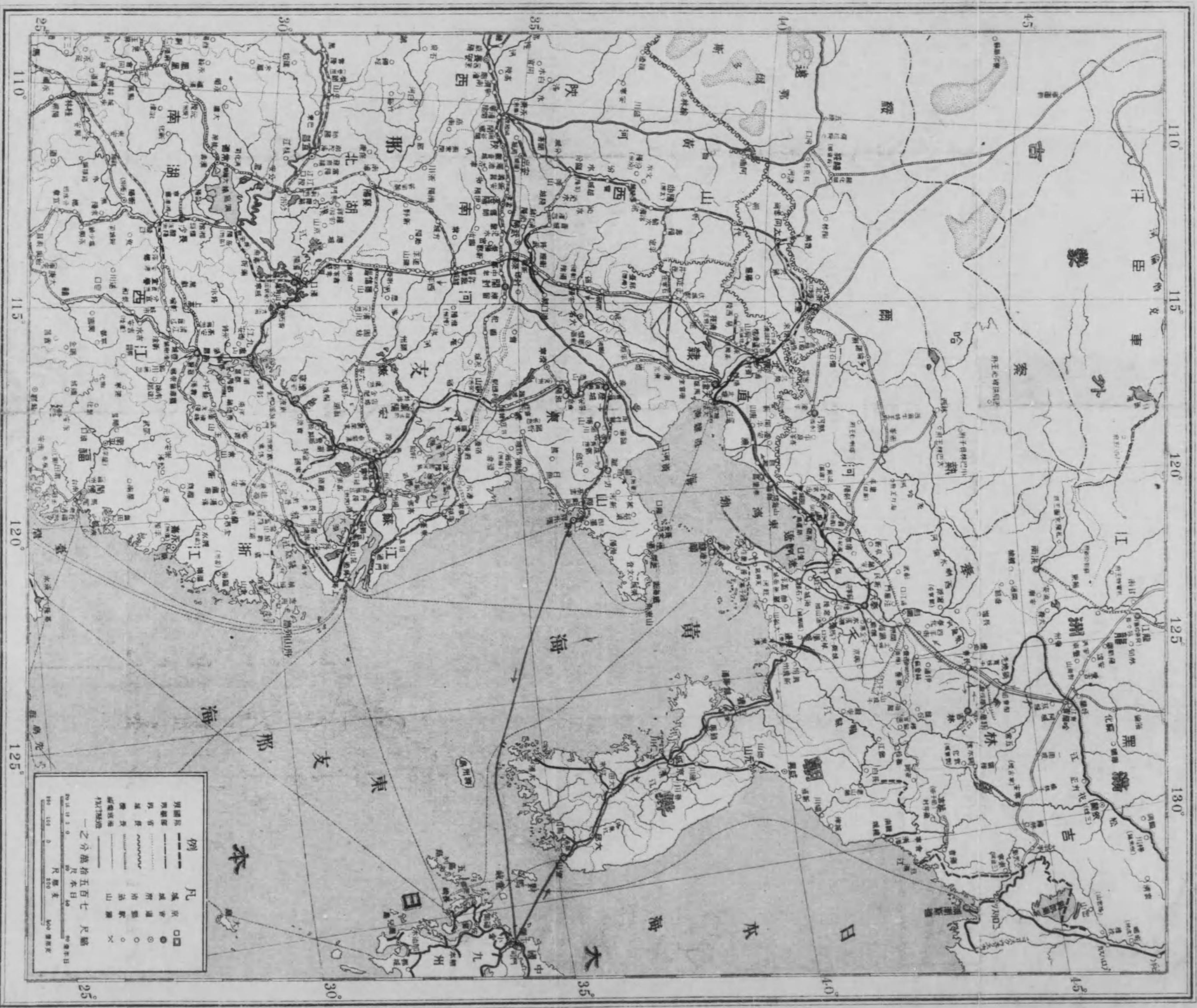
察

府王地海珠島



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

友那漫遊記附錄地圖



例

凡 城 縣 鎮 村 莊 山 海

○ 縣城 ○ 鎮 ○ 村 ○ 莊

—— 鐵路 —— 公路 —— 水陸交通線 —— 山 —— 海

比例尺 1:50,000 尺

1 寸 = 1 里

支那漫遊記目次

禹域鴻爪錄

東京より京城

- (一) 玄洋韓山……………大正六年九月十八日……………一
發程先づ京城に向ふ―金輪湧出水天紅―鶴巢居に行
李を安頓す
- (二) 雨又雨……………大正六年九月十九日……………二
早魃と秋雨の來襲―枕頭添得水聲多
- (三) 世界晴の好天氣……………大正六年九月廿一日……………三
果然喜鵲晴を報ず―恩平面の小松原―一碧極目松林
の下に
- (四) 漢江舟遊……………大正六年九月廿四日……………五

瀋陽の農事試験所―扁舟漢江に溯る―乘興欲銷千古
憂―奉恩寺

(五) 分外清……………大正六年九月廿四日……………七
健康恢復―鵲巢居は第一の安樂窩―聽到今宵分外清

京城より奉天

(六) 京城を發す……………九
鵲巢居出立―多望なる鑛業の將來―鑛業に次では農
業と水産

(七) 鴨綠江の大鐵橋……………大正六年九月廿六日……………一〇
鴨綠江鐵橋―龍の如く大陸と半島とを接續―千萬無
量の意義あり

(八) 安奉線……………大正六年九月廿六日……………一二
轉々今昔の感あり―秋色漸く深し―本溪湖の溶鑛爐

(九) 清朝の興廢……………大正六年九月廿七日……………一四
見物日和―北陵の觀更に荒廢―無名野草滿昭陵

(一〇) 前進一步……………大正六年九月廿七日……………一五
奉天は南滿經營の中心點―制度の罪乎人物の罪乎―
徹底的に實行するの力

(一一) 瀋陽の秋色……………大正六年九月廿七日……………一七
宮殿の見物―肝腎の寶器は空蟬の脱殻―人在瀋陽秋
色中―黃寺の佛殿と一切經

(一二) 張督軍……………大正六年九月廿九日……………一九
張督軍に面會―張督軍の風采―怖獨病と獨露同盟―
張督軍の野望

奉天より哈爾濱

(一三) 奉天より長春……………大正六年九月廿九日……………二三
哈爾濱行の急行車に上る―長春停車場―長春の繁昌

(一四) 東清鐵道……………大正六年九月廿九日……………二四

政治的勢力の實物教育—寬城子の光景—東清鐵道と
露國威信の下落—何等事務的統一なし

(一五) 滿洲の落日……………大正六年九月廿九日……………二六

・ 長春以北の秋色—滿目の平原大海の如し—富岳の日
出と滿洲の落日

(一六) 畫龍點睛……………大正六年九月三十日……………二七

愉快且有益の一日—露國極東經略の策源地—地理上
特殊位置は依然

(一七) 人造的市街……………大正六年九月三十日……………二九

哈爾賓は人造的市街—四區の總稱—無遠慮の支那人
種—三人種の雜居地

(一八) 大食小能…………………………三〇

男女商業學校—鐵道俱樂部の一老人—露國極東經營の

大頓挫—戦争と革命の餘波

(一九) 松花江……………大正六年九月三十日……………三三

松花江を溯りて傅家甸の見物—滿洲の生命の一—各
種の川魚と川鮫

(二〇) 革命の餘波…………………………三五

故伊藤公の遭難地—労働者の勢力—士官の屏息—哈
爾賓の治安

哈爾賓より長春、吉林

(二一) 滿洲の中秋……………大正六年十月一日……………三八

戦雲猶未度興安—座席の競争は一種の活戰場—滿洲
大平原の中秋—仰山なる支那人の宿引

(二二) 吉長鐵道…………………………四〇

毎夜早寝快眠—吉長鐵道と日本の臭ひ—快心の光景

に接觸

(二三) 去來流星の如し……………四二

吉林停車場著—孟恩遠將軍—郭吉林省長—二時間内の見物と訪問

(二四) 吉會鐵道……………大正六年十月二日……………四五

富源無盡藏—日本と吉林との接近—郭省長の人物—渾身是れ塵

長春より大連

(二五) 氣持好き長春……………四七

南滿の極北盡頭—地勢濶遠形勝を扼す—長春の地勢

(二六) 貨幣即貨物……………四九

通貨不定の標本地—通貨不定の一例—通貨も亦た一種の貨物

(二七) 長春より大連……………大正六年十月七日……………五〇

始めて旅館らしき心地—堀内中將來る—滿鐵にも改善の餘地多し—鐵嶺と海城—東京の大風雨を聞く—大谷光瑞師の來迎

大連と其の附近

(二八) 長き寢臺車……………大正六年十月八日……………五三

微恙の爲め謝客困臥—宗演師と三たび相見—久し振りの外出—大連貿易の盛況

(二九) 星が浦……………大正六年十月八日……………五五

星が浦に遊ぶ—散歩には好適地—海色の濃厚—年弱き外國婦人—却從星浦憶湘南

(三〇) 大谷光瑞師……………大正六年十月八日……………五七

大正二年首夏の相見—相面せざる三年餘—師は頂天立地の大丈夫—師は今尙ほ未成品—濟世高才無所用

(三一) 扇芳亭……………六〇

大連第一の旗亭—吾社同人の集會所—慄むべき二人者—「遼東第一樓」と書す

(三二) 老虎灘に遊ぶ……………大正六年十月九日……………六二

天更に清く氣最も温—海賊巢窟今は海水浴場—幾隊遊魚水底看

旅順の一日

(三三) 旅順に遊ぶ……………六五

四時四十分間の見物—訪問と處々の見物—今日の旅順—市場より禪堂に入りたるの心地

(三四) 旅順の誇り……………六六

都督官舎—誇りの一表忠塔—誇りの二旅順驛長—坐ろに千萬無量の感—今は國運發展の記念

(三五) 肅親王……………大正六年十月十日……………六九

親王中巨擘—肅親王を訪ふ—親王の風采と動作—同

病の足趾の水蟲—頗る感悚に堪へず

大連より營口

(三六) 滿鐵の評判……………七三

滿洲の經營と滿鐵—世間の噂—二—他山の石—中村前總裁—滿鐵に必要なるは創業の氣分

(三七) 大連より營口……………大正六年十月十一日……………七四

關東州の地味—何となく身は詩境に在り—沿道變化の著明

(三八) 營口の盛衰……………七六

營口の見物—過去繁昌の情力—前途必ずしも失望せず

(三九) 遼東と遼西……………七八

滿洲に於ける露英の勢力區域—遼西あるを知らず—遼西を如何せんとする

(四〇) 營口より山海關……………大正六年十月十一日……………八〇

河北停車場を發す―回々人の饅頭―三十九年曾宿の
旅館

一〇

山海關より秦皇島

(四一) 山海關……………八二

天氣一變小春日和―『天下第一關』の樓上―樓上の展望
―山河形勢爲誰雄

(四二) 秦皇島……………大正六年十月十三日……………八四

渤海盡頭唯一の良港―楊樹の上の旭日旗―秦皇島外
の光景と落日―靜寂なる休養旅館

秦皇島より北京

(四三) 秦皇島より北京……………八七

秦皇島を發して昌黎―沿道と天津大水害の表徴―北
京に直行

(四四) 汽車中偶目……………大正六年十月十四日……………八八

京奉線の所感一二―食堂内の亂雑には閉口―力を出
す前に聲を出す人種

(四五) 西村生……………大正六年十月十四日……………九〇

西村生死去の報知―家族の一人として遇す

北京雜觀

(四六) 紫禁城……………大正六年十月十五日……………九二

通衢大道の改善―紫禁城の解放―文華殿の書畫―武
英殿の諸寶什

(四七) 老柏と新男女……………大正六年十月十五日……………九四

中央公園の繁昌―老柏と歳寒の心

(四八) 再び文華殿を觀る……………九六

久振りの雨―再び文華殿の繪畫を見る―支那研究者
の好標本室

(四九) 乾隆帝の鑑識眼……………九七

乾隆帝の無遠慮の捺印―書畫の一大厄難―如何はし
き乾隆帝の鑑識眼

(五〇) 胡魔化の本姓……………大正六年十月十六日……………九八

紫禁城の胡魔化の一例―天壇も亦然り―袁世凱の本
性暴露

(五一) 段總理……………一〇一

晴運強し―段總理を訪問す―取締りの嚴重―段祺瑞
氏の風采と動作

(五二) 馮總統……………大正六年十月十七日……………一〇三

馮總統を訪問す―一見六十恰好の好々爺―老練熟達の
人―南海の横斷と其の光景―極樂世界に入りたるの感

(五三) 同舟遭風……………大正六年十月十七日……………一〇五

今後に於る北方の問題―馮段の合離如何にあり―兩

人契合の楔子

(五四) 雍和宮……………一〇七

愉快なる一日―雍和宮を見る―蒙古僧等の勤行時に
出會

(五五) 孔子廟と國子監……………一〇九

孔子廟の石鼓と古柏樹―國子監と乾隆帝御刻の石經
―孔子様にも多少の案内料

(五六) 北海の大觀……………大正六年十月十八日……………一一一

南海に比して更に大也―白塔山上の展望―北京及び
近郊の光景―瓊華島

(五七) 段芝貴と梁啓超……………一一三

武斷派中に屈指の一人―鐵獅子胡同の家―支那に於
ける唯一の新聞記者―『杜甫と彌耳敦』の愛讀者

(五八) 琉璃廠と隆福寺……………大正六年十月十九日……………一一五

古書肆の藪淵を見舞ふ―支那は實に大國―善本少な
し―古書肆と製本術―『殊域周咨錄』十冊

(五九) 名士歴訪……………大正六年十月十九日……………一二七

曹氏は段内閣の花形―『國民叢書』の愛讀者―湯氏は進
歩黨の代表者―著者の述作を購讀―元老の徐世昌氏
―徐氏の家―徐世昌氏の風采と態度

(六〇) 天寧寺と白雲觀……………一二一

天寧寺の荒廢―白雲觀と十二年前の觀主高仁峒―滿
懷の清氣に半日の消閑

(六一) 半畝園の雅集……………大正六年十月二十日……………一二四

半畝園の雅集と其の會者―逸品持寄會―舊式の晚餐

(六二) 團城の午餐會……………大正六年十月廿一日……………一二六

梁啓超氏の午餐會―北京にて東京の天麩羅を談ず―
承光殿と觀音の坐像―塵界奔走佛惠に孤負

(六三) 支那の魔力……………大正六年十月廿二日……………一二八

事實に於て征服者―支那人の辭令と料理―政局以外
に歴史的興味―一視同仁の觀音坐像

北京より十三陵

(六四) 明の十三陵……………大正六年十月廿二日……………一三一

京綏鐵道と支那人の誇り―十三陵途上の秋色―石駱
駝の上に立て撮影―長陵と大殿―明樓上に立つ―壽
山終古屬鼻雄―思陵

南口より青龍橋

(六五) 臙輪容易過居庸……………大正六年十月廿四日……………一三六

三關の絶景と途上の矚目―居庸關と諸家の題詠―三
關―隨處人爲的に破壞

八達嶺より張家口

(六六) 八達嶺……………一三九

大往還も荒廢せり―八達嶺と長城の破壊―駱駝隊商の往來―意外にも特別車の用意

(六七) 八達嶺より張家口……………一四一

八達嶺山洞の奔過―新保安店より張家口迄の途上

(六八) 張家口……………一四三

蒙古に接する咽喉―田中玉氏を訪問―蒙古人の風采―人力車に後押附の見物―汽車に歸りて安眠

張家口より大同府

(六九) 登登鐵路傍羊河……………一四七

張家口を發す―西灣堡より陽高縣―滿林黃葉已無多―大同府に著す

(七〇) 大同府……………一四八

古色蒼然の市街―大華殿に詣す―九龍壁の見物と知縣

の御馳走―無鳥里の蝙蝠

古石佛寺と湯山溫泉

(七一) 石佛三千倚峒隅……………一五三

駱駝橋にて古石佛寺へ―雨後の朔風と遅々たる馬蹄―崑山の奥に石佛寺を望む―結構の雄麗と滿院の荒涼―巨大なる石佛―寺樓に上る―大小幾百千の石佛―荒涼寶塔泣昏鳥―雷公嶺上凍雲垂

(七二) 大同より湯山……………一五八

雨一變して雪―曠原無際雪紛々―沙河より湯山溫泉へ

(七三) 湯山溫泉の今昔……………一五九

曾遊に比較して變化の較著に驚く―依然たる庭園と晩秋の景致―曹汝霖氏等の經營

(七四) 山中無曆日……………一六一

一日繰違への發見―山中無曆日の實驗者―天澄碧

(七五) 小湯山大湯山……………大正六年十月廿八日……………一六四

小湯山に上る―大湯山絶頂の眺望―人間の無残か神
様の無能か―深泥滿糞―世界第一の尿屎不始末國

京綏鐵道

(七六) 四百餘哩の往復……………大正六年十月廿九日……………一六七

欠振りに日本食の馳走―陰曆九月十五夜の滿月―愉
快なりし一日―四百餘哩の光景と二十八字詩

萬壽山に遊ぶ

(七七) 大谷光瑞師と同行……………大正六年十月廿九日……………一六九

大谷師の萬壽山案内―先づ耶律楚材の墓に詣す―成
吉思汗に於ける諸葛孔明―頤和園の風景と佛光閣上
の眺望―天厨の美味も此に過ぎず―中央公園にて群
集を見物―大谷師の好意を感謝し併せて前途を祝福す

北京を去る

(七八) 北京より最後の一書……………大正六年十月盡日……………一七四

滞在二週間并州の感あり―北京は面白き所―千客萬
來の北京―琉璃廠の戸別訪問―聊か誇るべき物

北京より漢口

(七九) 京漢鐵道(一)……………一七七

京漢鐵道修理全通の第一先乗客―『中原』の眞意義を會得

(八〇) 京漢鐵道(二)……………一七八

特に謝す可き兩君―吟情如水出燕京―老楊如蓋壠丘
間―汽車中より水害の一瞥―颯輪載夢過邯鄲

(八一) 京漢鐵道(三)……………一八一

宛是一幅故園圖―道入信陽看似畫

(八二) 宗演老漢……………大正六年十一月二日……………一八二

宗演老漢二行と相會—老漢の意氣倍々壯也—今後相
見るは何處乎

漢口

(八三) 漢口の今昔……………一八四

多望なる日本租界の前途—濁流混々真に壯觀—漢口
は南北衝突の緩衝地帯

(八四) 王督軍……………一八六

支那武人中傑出の王督軍—王氏の料理通と飲量—兩
人の責任亦た大

(八五) 黃鶴樓……………大正六年十一月三日…一八八

附近の殺風景—眺望は實に絶佳—革命功成群小雄

(八六) 漢口の兵營……………一九一

駐屯軍兵營を訪問—神頭現司令官と典倉舊司令官—駐
屯軍は長江平和の維持者—剛健なる壯漢と周邊の清潔

(八七) レース俱樂部……………一九三

漢口唯一の遊園地—氣持善き俱樂部の午餐會—漢口
の遊を了る

(八八) 瀨川總領事……………大正六年十一月四日…一九五

瀨川總領事との宿縁—晚餐の同席者と瀨川氏

九江より南昌

(八九) 下江して九江、南昌……………大正六年十一月五日…一九七

兩岸の秋色と詩興—長江中の一大要港—宛も東京四
月下旬の氣候—小舟にて瀟水を渡る—便所の閑却に
は閉口—金巾袋の効用

(九〇) 南潯鐵道……………二〇一

中支に於ける利權の中樞—眼前の損益掛念するに足
らず

(九一) 支那に於ける日本婦人……………大正六年十一月五日…二〇二

支那人に嫁せる日本婦人—浮かた支那人の口車に乗る—同様の結果は奴隸の境遇

- (九二) 陳督軍の朝餐會……………大正六年十一月六日……………二〇三
- 南昌市街を散歩す—陳督軍より朝餐の案内—辭す可らざる所以—朝起滕王閣を觀る—督軍との會見—且つ喫し且つ談ず—楓葉荻花秋瑟瑟の光景—愉快なる一日

廬山

- (九三) 廬山面目看來真……………大正六年十一月七日……………二〇八
- 自動車にて廬山へ—秋天洗出碧嶙峋—風景愈々佳なり—點來楓柏淺深紅—道傍の野菊と其の芳芬—南陽丸に乗込む

長江の激浪

- (九四) 大孤欲倒小孤欵……………大正六年十一月七日……………二一三

長江に於ける巨船—風浪と安臥の好時間—今後の旅程

南京の見物

- (九五) 蕪湖より南京……………大正六年十一月八日……………二一五
- 豫定より半日の損—一種の光景を映出す—兩度の劫運と南京市中の荒涼—依然たる鍾山—英國流のホテル
- (九六) 故宮の廢磚……………二一八
- 永樂帝御製の天妃宮碑—孝陵に向ふ—廢磚の運搬は建築用
- (九七) 懷古の安賣……………大正六年十一月九日……………二二〇
- 民國政府と道路の修理—見る影もなき滿洲旗人の部落—荒涼破壊中に於ける孝陵
- (九八) 李督軍……………二二三
- 督軍衙門に赴く—長江一帯の三督軍
- (九九) 秦 淮……………二二三

畫舫にて午餐—斯遊奇絶冠平生—秦淮の水と兩岸の
教坊—貢院の現状と環廢

(100)清涼山……………大正六年十一月九日……………二二六

舊著『吉田松陰』の支那譯—掃葉樓後頂上の眺望と秋色
—野菊滿地道路亦た馨し

長江の大觀

(101)鎮江と金山寺……………二二九

陳龍川文章の一節と鎮江—金山寺の結構壯麗—東坡
の玉帶を見る—眞に長江の大觀—寺庭の銀杏樹

(102)甘露寺……………大正六年十一月十日……………二三二

甘露寺は一層の上景—實に形勝の地—江南江北夕陽多

揚州一日記

(103)淡烟一抹是揚州……………二三六

漫遊よりも忙遊—江南佳麗地の揚州—淮南の運河と
煬帝の功—六朝金粉水悠悠—高洲君の邸に達す

(104)平山堂に遊ぶ……………二三九

支那富豪生活の皮相觀—平山堂見物に赴く—途中の
光景—光景歴々指點すべし—扁舟已過五亭橋—平山
堂と歐陽修—庭前の斑竹を伐て還る—高洲君の厚意
を感謝す

(105)焦山……………大正六年十一月十三日……………二四二

順風快流一帆焦山に向ふ—大江中に屹立の小嶼—定
慧寺より吸江樓—吸江亭上倚闌干—枕江閣にて精進
料理—長江の岸に沿うて徒歩—望外の眼福—好事何
人銘瘞鶴

上海雜信

(106)上海の發展……………大正六年十一月十三日……………二四七

上海の上景氣—十二年前に比して著明の發展—日本人俱樂部—又た宗演老師と會食

(107)支那語の必要

戴天仇氏の來訪と六三園の午餐會—競馬場中の日本人—日支記者の晚餐會—日支親善の捷徑—支那語學習の必要—彈き語り同様の余洵君の演説—前例已に英人により

(108)變化ある一日

各行脚者中の緩行者—吳昌碩老人の來訪—南方派諸氏と會見專ら孫洪伊氏と問答—上海支那新聞各社の招待會—龍華寺より江南機器局—外字新聞記者の晚餐會—クラーク老人

(109)岑春煊翁を訪ふ

若手揃中の老輩—南陽寄廬の門札—岑翁は毛色の變

りたる快活男兒—直に胸中の壘塊を吐く—舊人物中
見逃し難き一俤漢

(110)議 論 日

南方派領袖の晚餐會—譚人鳳氏と談論—譚翁の風采と學殖人格—寧ろ一種の理想家—二十世紀の現在尙ほ秦楚の決闘を繰返す

(111)十一月十六日

段内閣總辭職の北京電報—内外綿會社を見る—支那綿の缺點は量よりも質—英字新聞記者の午餐會—六三園の雅集—日本人俱樂部の同郷人會

上海より杭州

(112)勝景已知杭府近

好天氣と汽車旅行の愉快—途上の光景と玉川附近の
昨今—瀨上領事の出迎—新市街と大道との出來—理

想の實現と領事館の食客

(一一三)西湖舟遊……………大正六年十一月十八日……二六九

小舟を議して西湖に遊ぶ―西湖名勝の歴遊―雷峰塔
昨夕陽斜

(一一四)西湖一周記……………大正六年十一月十九日……二七二

最上の遊覽日―千古西湖屬美人―靈隱寺に向ふ―仰
山なる支那の墳墓―支那第一の靈境―淨慈寺と石橋
―紫陽峰八封石上の眺望―瀨上君の爲め記念の一詩

(一一五)名所の保存……………大正六年十一月二十日……二七六

寶石山頭に上る―西湖の眼目地に肺病院―浙江省長
と名所舊蹟の保存―好景と好友と好日

上海雜信(再び)

(一一六)思想界の三分……………大正六年十一月廿一日……二八〇

宗社黨中の學者沈曾植翁―十二年前の舊相識姚文藻

翁―豫言の偶中―書に隠るゝ李梅庵―支那の現時と
思想界の三派―不思議なる支那人種―其の眞面目を
知る最も難し

(一一七)人及び書籍……………大正六年十一月廿二日……二八三

宛然小李鴻章たる李經邁氏―議論極めて痛快―最も
多く印象を興へたる二人者―セヌフィールド路公園の
プラタナス樹―菊蹊窮處竹溪通―劉承幹氏の嘉惠堂
文庫―會者悉く好古の士

(一一八)書籍の生命……………大正六年十一月廿三日……二八七

所謂る古川に水多し―嘉惠堂文庫中の珍籍―蔣汝藻
氏の藏儲―宋雪巖の忘機集―子孫嚮之何其愚―支那
に於ける書籍の生命

(一一九)上海に告別す……………大正六年十一月廿三日……二八九

上海に十日餘滯留―上海に於ける日本人の勢力―

事變毎に上海の膨脹―藤村男爵及夫人の厚意

蘇州より曲阜

(二一〇)虎邱と天平山……………二九二

三夜間洋服の丸履―上海より蘇州に向ふ―虎邱の荒廢と日本鐘の鐘銘―御道と附近の農家―全山奇石の天平山―滿山紅葉―天平山上弔希文

(二一一)留園と寶帶橋……………二九七

楓橋と寒山寺―留園と盛宣懷氏の葬儀―本葬儀費五十萬元―李鴻章門下の一人―舟にて寶帶橋上の見物―寶帶橋上の夕陽―黒澤君の用意周到の案内―書畫の逸品と佛畫―月明如夢過姑蘇

(二一二)蘇州より曲阜……………三〇一

支那旅行の當惑は南京蟲と乞食―一等室と支那人の乗客―曲阜に下車―滿天の月明と主人なき宿泊所―

旅行中の珍且つ奇なる一夜

(二一三)孔 林……………三〇四

田中君と支那馬車にて發す―泗水を渡る―紅日生邊是孔林―孔子の墓―孔林の番人と案内料―數千年の古柏

(二一四)大成殿……………大正六年十一月廿七日……………三〇七

顔子廟と虎皮松―孔子廟の莊嚴は一大宮闕の觀―杏壇と大成殿―明時代の奎文閣と幾多の漢碑―泰安府停車場に著す―愉快なる一輪車

泰 山

(二一五)月夜の登岱……………三一三

山輦に乘りて登山―輦の特色と輦夫の熟練―晝の如き十一夜の月色―支那歴代帝王の巡幸と詩人文士の題詠―踏月孤筇上泰山―六千七百級の石磴―斗母宮に著して宿す―巡警兵士は良民の厄介物

(二二六) 漸入佳境……………三二七

石經峪の大淵石―漸入佳境の實況―三大士殿―登山の中宿にて休息―増福廟と酌泉亭―乾隆帝の萬丈碑―泰山第一の難所十八盤―應助の封禪儀記の一節―南天門登攀の困難

(二二七) 絶頂の大観……………大正六年十一月廿八日……………三二〇

關帝廟前の回看―一氣に絶頂に上る―齊魯平原の好展望―全山の光景は雄石巖々―唐玄宗帝の紀泰山銘の摩崖碑―碧霞元君の廟と其の結構―泰山の五名物―登路に六時間下山には二時間―岱廟は支那歴史の寶庫―荷物車にて濟南迄―難きに暇かず易きに頷く

濟南より青島

(二二八) 濟南……………三二七

悠然濟南に落附く―好天氣の下に愉快の三日―濟南

(二二九) 濟南と山水……………大正六年十二月一日……………三三一

山東省の首府―日本人品質改善の時期―濟南の新聞の論調―日本人の山東に於ける勢力―物質上の一大要件
濟南の大観は南方の千佛山―片華と双河―濟南は水の都―大明湖に泛ぶ―湖堤楊柳幾人家―小清河―黄河河堤に上る―黄河と揚子江との二大特性―華山仍舊秀容多

(二三〇) 献身的努力者……………大正六年十二月二日……………三三五

宣教師中献身的努力者―齊魯大學の規模―新敷地に新築の大學―廣智院は一種の博物館―廣智院と感化の偉大―廣智院丈は目撃の價値あり―曉天の星

(二三一) 濟南より博山……………大正六年十二月三日……………三三九

滿鐵式の山東鐵道―博山は石炭の産地―煤煙千丈入
青空―博山爐―東和公司より顏氏廟に赴く―顏氏廟

と孝婦の塑像―顔神鎮と山積の陶器―愈々進み愈々奮ふ三宅氏の事業

(一三三)博山より坊子……………三四四

金嶺鎮の鐵山を瞥見―小學先生の代用に軍服の兵士―濰縣の陳氏を訪問―古書と鄭板橋の書畫其他―坊子の晩飲會―日本流の宴會

(一三四)青島に著す……………大正六年十二月四日……………三四六

天氣變調―制錢商賣―強盜除けの穴錢―日本人の信用失墜―地質調査の必要―一鏡波光林外青―山東苦力の西歐輸送―青島に著して本郷司令官を訪ふ

青島一瞥

(一三五)カイゼルの功德……………三五〇

滿目の白雲と戰跡の見物―獨逸人の實物教育―經營業就付他人―舊相識の島村民衛氏―本郷司令官の晩餐會

(一三六)勞山の快……………大正六年十二月五日……………三五三

好天氣と勞山の快遊―山道を攀て柳樹臺―何處迄も獨逸氣質の發揮―勞山灣は眼下に展開―老君廟前の午餐―易鼎順氏の詩―一段披來一段奇

(一三七)支那に於ける最終の日……………大正六年十二月六日……………三五八

此行の最終日―獨逸人と堅忍不拔の精神―此日は専ら訪問―海水浴場附近の散歩―天道親なし惟徳是れ興みす

(一三八)意外なる發見……………大正六年十二月六日……………三六〇

給仕薛紹銀に就て―第一の意外―彼は極めて正直にして不欺―信賴に負かず―支那人に擘なる温かなる心腸―彼を待つに同行者―卻立埒頭暗涙多

青島より東京

(一三九)興未闌……………大正六年十二月九日……………三六五

遊支偶錄

三六

愈々青島を去る―履歷附の老船西京丸―關門海峡に
著諸友の出迎―小門の午餐―三月浪遊興未闌―征虎
軍の山本總帥と邂逅す―神戸より京都―静岡より東
京―還家と老母の出迎

(一)前遊と今遊……………三六九

先じて發し後れて歸る―八十六日間の行程一斑―前
遊との比較―今遊の天幸

(二)妄言と妄聽……………三七二

要するに漫遊のみ―赤裸々に支那と接觸―百聞一見
に若かず―妄言者と妄聽者

(三)社會の變遷……………三七四

殆んど辮髮者を見ず―僅かに復辟派の老輩―辮髮廢

止の意義―支那婦人の解放

(四)壯年の天下……………三七六

今日は新人物の世の中―壯年の時代來る―壯年の天
下と支那の進歩

(五)道路の改善……………三七八

支那の道路―北京及隨處通邑大都の道路―南京及び
蘇州、杭州―支那の變化と日本の進歩緩慢

(六)日本教師の退去と日本語の驅逐……………三八〇

更らに一の意外―日本人の教師殆ど絶無―其の理由
如何―日本語の驅逐―實に甚大の憂惧

(七)同文書院の効果……………三八二

支那人中の日本語堪能者―日本人中の支那語堪能者
―同文書院出身者と同院今後の規模

(八)日本語の閑却乎日本の閑却乎……………三八四

三七

過去に於ける支那留學生の賜物—日支人間の會話に
英語の使用—支那人の日本閉却

(九)言語の共通

言語の共通と思想感情との共通—善用の効果—支那
に於ける日本語の將來—敢て朝野の識者に警告す

(一〇)難有迷惑

親善の裏に不親善の事實—親善の事實を示せ—恩を
仇—日本人の親善の仕方—下戸の頭上に酒を澆ぐ

(一一)文明中毒國

世界的の支那の文明—支那人は寧ろ餘りに文明—生
れながらに蘇秦張儀—支那は文明中毒國

(一二)一片の空證文

日支親善と三個の要素—力とは何ぞや—利益とは何
ぞや—思想及感情とは何ぞや—三要素を除掉しての

親善

(一三)信頼と安堵

力の福音は支那感化の第一戰—いざと云ふ場合の覺
悟—風の吹き廻しと其の仕打の不徹底—力の不足乎
決心の不足乎

(一四)高帽の和寇

利益の共通と多大の缺陷—餘りに多く自己本位—嫌
忌と憎惡とは必然の結果—日支親善の實行難

(一五)歐米人と日本人

歐米人は何となく鷹揚—日本人と獨逸人との比較—
買辦制度と歐米人及び日本人—他方にそれ以上の代
價

(一六)取る乎與ふる乎

與ふる事の取たるを解せず—大に與ふる歐米人—實

利主義の支那人に物質上の寄與―何の處にか親善の楔子を見ん

(一七)プロバガンダ……………四〇四

何等の施設なかりし思想感情の共通問題―獨逸人の『プロバガンダ』―英米人もそれ相應に努力―我が官民の冷淡に驚く

(一八)思讎の念……………四〇六

理窟に囚はれたる人種―種々の言草が入用―不淡泊と理窟の製造―忘讎者にあらず

(一九)下宿屋の敵討……………四〇八

排日の一半は日本人自から誘起―支那人に對して温なる心腸の表示―打算以外の打算と損得以上の損得―支那人の思想及感情を尊重せよ

(二〇)腑甲斐なし……………四一一

所謂る同文同種―遠き歐米人に倚る―歐米人を買収り日本人を買落す―自から便宜の位置を失墜して他に乗ぜらる

(二一)半醒半睡……………四一三

支那彼自身の立場に理解なし―自覺と覺悟の不徹底―支那の對外政策―李袁二氏の對外政策の失敗

(二二)日支の經濟關係……………四一五

先づ日本と結託す可し―日支の經濟的同盟―日貨排斥と日本商人―支那は日本の原料國―日本の自給自活と支那の供給

(二三)日本の自給自活……………四一七

日支の經濟的關係は國家死活の關係―支那と經濟同盟と同盟の場合―支那の弱味―日本を敵として支那の獨立

(二四)日本人を利用せよ……………四一九

支那こそ造化の寵兒―政府の貧にして邦土の貧に非ず―支那の憂は富源を開發せざるにあり―進んで日本人を利用せよ

(二五)如何にして支那を利用す可き乎……………四二一

日本側に於ても支那人を利用せよ―何故に便宜を利用せざる―支那に對して一大重責を負担するの決心―經濟的同盟の目的手段―淺薄なる了見

(二六)日本人支那人を知らず……………四二三

支那に對する智識の不充分―己を以て他を料る―立國の根帯と歴史的成立の差別―最も古き人種と最も古き歴史

(二七)四千年の歴史……………四二五

支那人は不可解の謎題―主觀的獨斷の結果―今の支

那は古の支那の如し

(二八)今猶ほ古の如し……………四二七

歴史は繰返すとは支那に於て最も適切―春秋戰國時代の秦楚と同様―支那人彼れ自身研究の閑却

(二九)楚材晋用……………四二九

楚は人物の産地―春秋時代の例―思想文藝の上に於ても異彩―鬼谷子と屈原―人材多きは今に於ても然り

(三〇)犬の骨折鷹の功名……………四三一

秦と楚―楚の死灰―長髮賊の亂と楚軍―其實は獲物分配の如何にあり―南北統一と現今の状態

(三一)支那人支那を知らず……………四三三

支那特有の民風國俗―日支兩國人の一大誤謬―支那と日本の維新改革史―日本に於てさへも約四十年の

(三三) 家族と世界……………四三五

支那は寧ろ一世界一萬世一系の皇統と二十四朝革命の歴史一兩々相反す一治めざるを以て民を治む一中央集權政治の不成功は必然の數

(三四) 翻譯政治の失敗……………四三七

自から求めたる翻譯政治の失敗一日本に於てさへ多大の困難一衰にして尙ほ失敗一支那の中央集權政治は到底不可能

(三五) 袁世凱の幽靈……………四三九

厄介な幽靈一今日の支那政局の大役者と袁の縁故一長江筋の三督軍其他一死せる袁世凱活ける支那を擾亂す一幾多小袁世凱の争闘

(三六) 三個の要件……………四四一

全く見當違ひの意氣込一中央集權政治と三個の要件一果して此に一ある乎一唯だ破壊作用に於て一致

(三七) 精神的缺乏……………四四三

支那の憲政と無準備不用心一名ありて實なき中央集權政治一國民的精神の缺乏一殆んど不可能の状態

(三八) 財界より見たる無數の小獨立國……………四四五

統一に至緊なる兵權と財力一日本の統一一支那を見よ一殆んど財政なき支那一幣制財政の不統一

(三九) 空囊の中央政府……………四四七

唯だ中央政府貧乏のみ一財界に於て無勢力の一證一自ら一の中央銀行なし一關稅と鹽稅一空囊を提げて天下に號令す

(四〇) 兵士は食客……………四四九

兵權なき中央政府一督軍其他の私有兵士一片の空

文督軍を指揮命令する能はず

(四〇)孟恩遠の芝居……………四五二

吉林督軍孟恩遠—孟恩遠更迭—孟恩遠轉任の沙汰止
—騷擾平定の功—地方督軍の權力

(四一)統一乎分裂乎……………四五三

三個の統一なし—到底平和安寧の期なし—中央集權
と南北對立—南北對立は卓上の空想

(四二)支那合衆國……………四五六

唯だ一策あるのみ—北米合衆國と獨逸聯邦—支那の
聯邦制度—封建の勢今日迄繼續

(四三)各省自治……………四五七

支那人の心意氣と各省自治—文明的封建政治—尾大
不振は支那固有の痼疾—孰れを取る可しと爲す乎

(四四)自治は自衛也……………四五九

大國を治むるは小鮮を烹るが如し—自治は即ち自衛
也—世界の氣運と大英帝國—中央集權は支那を小な
らしむ

(四五)財力統一……………四六一

中央政府の存在必要—第一に通貨の整理—第二に金
本位制の施行—金銀價格の變動と其の影響

(四六)燒石に水……………四六三

幣制統一は議論よりも實行の域—中央銀行創設の必
要—支那人商事會社の不成功

(四七)中央銀行の創設……………四六五

會社を喰て私腹を肥す—泥坊に追錢の類—支那人以
外の監督者に一任—政府の根柢動搖と支那人の營利
根性

(四八)尙武と右文……………四六七

一は尙武國一は右文國一武人は餘儀なき場合に餘儀なく使用一好漢兵と爲らず好鐵釘と爲らず一支那の軍隊は持凶器強盜

(四九) 模擬戦争と模擬賭博……………四六九

日本兒童の遊戯は模倣戦争一支那兒童の遊戯は模擬賭博一武張りたる點なし一戦争せざる爲めの兵士一兵士買收の八萬元

(五〇) 自力の防禦乎他力の防禦乎……………四七一

外敵に弱きが支那歴史の状態一他力の獨立乎一外力庇護の下に安全保障一日支攻守の同盟

(五一) 新學の流行……………四七三

權利思想の鼓吹一家族ありて國家なし一政府の威嚴は強者の威嚴一唯だ皮相に止まる

(五二) 政治屋の看板……………四七五

孔子の教旨と支那人實際の生活一某父許由は却て支那人の理想一孔子は陽尊陰排せらる一孔夫子は歴代治者の商標のみ

(五三) 新學は則ち舊學のみ……………四七八

新學實は舊學一内容を霸道にして外形を王道一權利利益の觀念の強盛濃厚一權利を以て經とし利益を以て緯とす

(五四) 孔夫子は老莊商韓の下た働き役者のみ……………四八〇

主義よりも方便に利用一儒教の支那に歡迎せらるゝ所以一儒教の流弊一儒教は老莊商韓の下た働き

(五五) 不得要領……………四八二

世界の妥協的二人人種一衰斃るゝも無數の小袁一妥協に次ぐに妥協一維新の大業と武力改革の斷行

(五六) 受動的抵抗……………四八四

支那人の強點は受動的抵抗―支那人の面従腹否―商租權一件は其の一證―流石の日本人も閉口

(五七)體面的虚飾……………四八六

他方に對面的虚飾―支那人を支配する法律以上の法律―實利と虚榮―他方に面否腹従―支那人の虚榮心は寧ろ美點

(五八)無事的調法物有事の厄介物……………四八八

一旦緩急的と普通尋常的―生命ある器械―既定順序の翻轉と弱點の暴露―自から求めて自から得―支那人としては最善の所爲

(五九)常に處して變に處せず……………四九〇

神智靈覺は支那人の不长所―常に處して變に處せず―本來の模型的人種―模型中に醉生夢死―古の支那人は優秀なる精神的出產者

(六〇)數の勢力……………四九二

支那の強味は人口の衆―牛馬と人間との輕重―兵士を募集するに於ても―今日は數其物が大勢力―數は即ち資本也

(六一)烏合の衆……………四九四

數と支那人―組織結合と二個の作用―個人萬能團體零能―支那人の雷同性―衆ありて大を倣す能はず

(六二)言論の勢力……………四九六

公議輿論と無機關―流賊の先驅は人心の放潰―衆庶の心理情態を作用とす―雷同性と言論の力―童謡俚歌さへも偉大の勢力

(六三)新聞雜誌の勢力……………四九八

寧ろ訛傳流説の有力―處士横議の風は古今同一倣―今後に於ける新聞雜誌の勢力―支那にハーストとノ

(六四)興亞的一大新聞……………五〇〇

上海の『北支那日々新聞』の勢力―日支親善の機關新
聞―吾人の希望は至難の業なり―噬臍の悔あらん

(六五)道教の天下……………五〇二

支那は事實に於て道教の天下―支那人道教を作る―
佛教と道教との關係

(六六)回教徒……………五〇四

支那の眞宗教は回教―宗教的生命の維持者―回教徒
は一種の秘密結社―氣脈相接し聲息相通ずる團結―
回教徒の多数は西域の移住者―特殊部落の待遇―仕
途の困難―宗門の戒律を守る―沙漠中の美林嘉蔭

(六七)日本の歴史と支那の歴史……………五〇八

最遠の皇室―日本の歴史と文献―日本の歴史の稀薄

―支那文化の絶頂周時代は日本の神話時代―歴史的
支那の舊國

(六八)一大不思議……………五一一

支那史の久遠なる繼續―最舊國の標本―久遠なる歴
史を引うて現存す―寧ろ驚嘆に値す

(六九)無底無口の大淵……………五一三

進一步の研究―二個の理由―希臘と羅馬帝國―支那
人の支那と運輸交通の便―支那は無底無口の大淵

(七〇)支那の恩人は胡也……………五一六

新泉源の注入―生命の存續は胡の餘澤―恒に胡患に
よりにて警醒せらる―文にして衆衆にして且濃

(七一)一大同化作用……………五一八

支那は大なる化石地獄―支那の文明は包容的―異邦
の文明と人物を採用―支那化する一大作用

(七二) 何故に支那文明の同化力は宏大なる乎……………五二〇

支那化せずんば止まず—支那文明の同化力—同化作用の無敵なる所以—支那文明の敵は其の久遠の歴史

(七三) 日支何れか同化力強き乎……………五三二

支那に於ける物質上の愉快と便宜—支那の料理は世界を席捲せり—無意識裡に催眠術に誘ふの魔力—武力に勝て文明に併呑せらる

(七四) 二重人格……………五二四

先天的の二重人格—論語逆讀の法を以て支那人を解釋—比較的樂天人種

(七五) 理想と實際……………五二六

表街道の外に裏道—議論の爲めに議論す—實際と理想との兩方面併觀—一個の支那は兩個の支那

(七六) 支那人の伎倆……………五二九

不自然なる敵對の兩者を自然的に併行—見當違ひの觀察—理想を實踐せざる支那人—支那人の理想と婦女子の衣服

(七七) 支那古典の研究……………五三二

善言者と善行者—世界文明に貢獻する所多大—天地間稀有の產物—支那學問の興隆は興亞の一大長策

(七八) 空論國……………五三五

言論國文字國空論國—饒舌は一種の國民的性格—聯合軍と議院政治—俗吏政治と巧辯家政治

(七九) 空論亡國……………五三七

虞るゝ所は支那的空論の流行—議論の効用は實行にあり—言論は支那實行は日本—言論と亡國の端

(八〇) 豊富なる歴史……………五三九

舊且つ大の百科字彙的支那國—『國民協盟』の先驅者

—支那官人氣質の暴露—豊富なる歴史を有する支那は幸乎不幸乎

(八二)利の一字……………五四二

支那上下古今を通ずる一大觀念—太史公の貨殖傳—利の一字是れ其生命—利に趨るの熱心と勇氣

(八三)公認泥坊……………五四五

利の爲めに名を犠牲—支那の官吏は清職に非ず濁職—寧ろ貪吏の汚名—兵士に三個の利得—官吏と兵士とは公認泥坊

(八四)支那の鐵道……………五四七

三十年前著者の支那論—紙上の空言事實として現出—鐵道の開通は支那の一大刺戟—現時の支那鐵道は概れ不具體

(八五)南潯鐵道と山東鐵道……………五四九

南潯鐵道と其の將來—山東鐵道と其の將來—支那橫斷の一大幹線—我が當局者の袖手傍觀

(八六)亞歐の大聯絡……………五五二

獨逸人の山東省著眼—世界的大經綸の爲めに一子を下す—支那に於ける地下の富—新疆方面と棉花供給—資源の開拓と日支合辦

(八七)多大の希望……………五五四

姑らく此に欄筆—最後に一言せしめよ—支那人は偉大なる國民—日支親善の要訣

支那漫遊記寫真目次

五八

- 一 鴨綠江大鐵橋上の蘇峰學人……………『本文(七)鴨綠江の大鐵橋』……………一一
- 一 安奉線橋頭驛附近の高梁畑、安東縣大和町、安奉線釣魚臺、安奉線鷄冠山驛に於ける蘇峰學人と東邊鎮守使馬龍譚氏……………『本文(八)安奉線』……………一三
- 一 北陵陵道に立てる蘇峰學人、北陵拜殿、北陵太宗文皇帝愛馬の石像、北陵太宗文皇帝の土饅頭……………『本文(九)清朝の興廢』……………一五
- 一 奉天停車場……………『本文(一〇)前進一步』……………一六
- 一 奉天黃寺の寶藏、奉天宮殿内の崇政殿、奉天延壽寺の西塔磚製の獅子、奉天の郊外……………『本文(一一)瀋陽の秋色』……………一八
- 一 奉天督軍張作霖氏肖像……………『本文(一二)張督軍』……………二〇

- 一 長春驛……………『本文(一三)奉天より長春』……………二三
- 一 哈爾濱の東清鐵道廳……………『本文(一八)大食小籠』……………三一
- 一 哈爾濱停車場故伊藤公遭難地點に立てる蘇峰學人……………『本文(二〇)革命の餘波』……………三六
- 一 吉林線土門嶺驛……………『本文(二二)吉長鐵道』……………四一
- 一 吉林督軍孟恩遠氏肖像……………『本文(二三)去來流星の如し』……………四三
- 一 北山上より望みたる吉林……………『本文(二三)去來流星の如し』……………四四
- 一 長春回々教清真寺……………『本文(二五)氣持好き長春』……………四八
- 一 大連大和ホテル樓上より俯瞰せる大連市街……………『本文(二八)長き寢臺車』……………五四
- 一 大谷光瑞師肖像……………『本文(三〇)大谷光瑞師』……………五八
- 一 老虎灘……………『本文(三二)老虎灘に遊ぶ』……………六三
- 一 旅順白玉山表忠塔……………『本文(三四)旅順の誇り』……………六七

五九

- 一 肅親王肖像……………『本文(三五)肅親王』……………七〇
- 一 金州南山の遠望……………『本文(三七)大連より營口』……………七五
- 一 營口より見たる遼河……………『本文(三八)營口の盛衰』……………七七
- 一 營口對岸河北停車場……………『本文(四〇)營口より山海關』……………八〇
- 一 山海關『天下第一關』、『天下第一關』より山海關城内
を望む、山海關道教三清觀、山海關回々教清真寺……………
……………『本文(四一)山海關』……………八二
- 一 山海關『天下第一關』城壁上の蘇峰學人……………『本文(四一)山海關』……………八三
- 一 秦皇島埠頭……………『本文(四二)秦皇島』……………八五
- 一 秦皇島無線電信柱、秦皇島驛日本守備兵、天津の下流
白河の氾濫、北京正陽門……………『本文(四三)秦皇島より北京』……………八六
- 一 北京の紫禁城……………『本文(四六)紫禁城』……………九三
- 一 北京天壇……………『本文(五〇)胡寬化の本性』……………一〇〇

- 一 段總理肖像……………『本文(五一)段總理』……………一〇二
- 一 馮總統肖像……………『本文(五二)馮總統』……………一〇四
- 一 北京雍和宮……………『本文(五四)雍和宮』……………一〇八
- 一 孔子廟の石鼓……………『本文(五五)孔子廟と國子監』……………一〇九
- 一 國子監……………『本文(五五)孔子廟と國子監』……………一一〇
- 一 孔子廟大成殿……………『本文(五五)孔子廟と國子監』……………一一一
- 一 北京北海瓊華島大喇嘛塔の遠望、同喇嘛塔上より景
山を望む、同喇嘛塔上の陶製壁佛……………
……………『本文(五六)北海の大觀』……………一二二
- 一 段芝貴氏と梁啓超氏肖像……………『本文(五七)段芝貴と梁啓超』……………一二四
- 一 北京隆福寺街文奎堂書店に於ける蘇峰學人……………
……………『本文(五八)琉璃廠と隆福寺』……………一六
- 一 曹汝霖氏肖像……………『本文(五九)名士歴訪』……………一八

- 一 徐世昌氏肖像……………『本文(五九)名士歴訪』……………一二〇
- 一 北京天寧寺……………『本文(六〇)天寧寺と白雲觀』……………一二二
- 一 北京白雲觀……………『本文(六〇)天寧寺と白雲觀』……………一二三
- 一 汪大燮氏肖像……………『本文(六一)半畝園の雅集』……………一二五
- 一 明十三陵の石駱駝……………『本文(六四)明の十三陵』……………一三二
- 一 明十三陵陵道所見明十三陵中の長陵、明十三陵中の長陵の輿牌門、廢壞の石橋……………『本文(六四)明の十三陵』……………一三三
- 一 明成祖文皇帝之陵……………『本文(六四)明の十三陵』……………一三四
- 一 居庸關附近の舊道……………『本文(六四)廳輪容易過居庸』……………一三七
- 一 八達嶺關外の遠望……………『本(六六)八達嶺』……………一三九
- 一 八達嶺關外の駱駝隊……………『本文(六六)八達嶺』……………一四〇
- 一 八達嶺上の長城……………『本文(六七)八達嶺より張家口』……………一四二
- 一 察哈爾都統田中玉氏肖像……………『本文(六八)張家口』……………一四三

- 一 張家口市街……………『本文(六八)張家口』……………一四五
- 一 大華嚴寺……………『本文(七〇)大同府』……………一四九
- 一 九龍壁……………『本文(七〇)大同府』……………一五一
- 一 石佛寺見物途中の駱駝轎……………『本文(七一)石佛三千倚峒隔』……………一五四
- 一 古石佛寺……………『本文(七一)石佛三千倚峒隔』……………一五五
- 一 古石佛寺の石佛……………『本文(七一)石佛三千倚峒隔』……………一五六
- 一 湯山温泉ホテル……………『本文(七三)湯山温泉の今昔』……………一六〇
- 一 湯山温泉ホテル後庭より大湯山を望む……………『本文(七四)山中無曆日』……………一六二
- 一 大湯山上より直隸省の平野を望む……………『本文(七五)小湯大湯山』……………一六五
- 一 北京萬壽山耶律楚材像、萬壽山昆明湖扁舟上の大谷光瑞師と蘇峰學人、北京中央公園に開催の天津水害……………

救助金募集の抽籤會場、北京中央公園の格言塔……………

北京萬壽山麓耶律楚材碑畔に於ける大谷光瑞師と
蘇峰學人……………『本文(七七)大谷光瑞師と同行』……………一七〇

萬壽山昆明湖上より佛光閣を望む……………

漢口漢水の戎克……………『本文(七七)大谷光瑞師と同行』……………一七二

湖北督軍王占元氏肖像……………『本文(八三)漢口の今昔』……………一八五

黃鶴樓……………『本文(八四)王督軍』……………一八七

元代の大理石喇嘛塔……………『本文(八五)黃鶴樓』……………一八九

漢口駐屯軍兵營に於ける神頭司令官と蘇峰學人……………

漢口總領事館に於ける瀨川總領事と蘇峰學人……………『本文(八五)黃鶴樓』……………一九〇

漢口總領事館に於ける瀨川總領事と蘇峰學人……………『本文(八六)漢口の兵營』……………一九二

南昌の贛水……………『本文(八八)瀨川總領事』……………一九五

南昌の客棧怡園……………『本文(八九)下江して九江南昌』……………一九八

江西督軍陳光遠氏肖像……………『本文(八九)下江して九江南昌』……………二〇〇

廬山……………『本文(九二)陳督軍の朝餐會』……………二〇五

香爐峰……………『本文(九三)廬山面目看來眞』……………二〇九

大孤山と小孤山……………『本文(九三)廬山面目看來眞』……………二一一

燕湖の遠望……………『本文(九三)廬山面目看來眞』……………二一一

永樂帝御製天妃宮碑……………『本文(九四)大孤欲倒小孤欲』……………二一四

南京孝陵明太祖畫像、孝陵の石馬、孝陵雜草離々たる……………『本文(九四)大孤欲倒小孤欲』……………二一四

陵道、舊帝宮の礎石……………『本文(九五)燕湖より南京』……………二一六

南京督軍李純氏肖像……………『本文(九五)燕湖より南京』……………二一六

秦淮の畫舫……………『本文(九六)故宮の廢磚』……………二一九

秦淮の畫舫……………『本文(九七)懷古の安甯』……………二二一

秦淮の畫舫……………『本文(九八)李督軍』……………二二三

秦淮の畫舫……………『本文(九九)秦淮』……………二二四

- 一 南京貢院……………『本文(九九)秦淮』……………二二五
- 一 金山寺……………『本文(一〇二)鎮江と金山寺』……………二三〇
- 一 金山寺の高塔と『江天一覽』亭子……………
- ……………『本文(一〇一)鎮江と金山寺』……………二三一
- 一 甘露寺の多景樓……………『本文(一〇二)甘露寺』……………二三三
- 一 揚州の運河……………『本文(一〇三)淡烟一抹是揚州』……………二三七
- 一 揚州史可法の墓……………『本文(一〇四)平山堂に遊ぶ』……………二三九
- 一 揚州五亭橋……………『本文(一〇四)平山堂に遊ぶ』……………二四一
- 一 上海戎克波止場……………『本文(一〇六)上海の發展』……………二四八
- 一 孫洪伊氏、戴天仇氏、柏文蔚氏肖像……………
- ……………『本文(一〇八)變化ある一日』……………二五三
- 一 上海龍華寺の塔……………『本文(一〇八)變化ある一日』……………二五四
- 一 岑春煊氏肖像……………『本文(一〇九)岑春煊翁を訪ふ』……………二五七

- 一 杭州領事館……………『本文(一一二)勝景已知杭府近』……………二六七
- 一 西湖三潭印月……………『本文(一一三)西湖舟遊』……………二七〇
- 一 西湖三潭印月より雷峰塔を望む……………『本文(一一三)西湖舟遊』……………二七一
- 一 西湖西冷橋畔蘇小青の墓……………『本文(一一四)西湖一周記』……………二七三
- 一 西湖岳王墳……………『本文(一一四)西湖一周記』……………二七四
- 一 西湖吳山第一峰より錢塘江を望む……………
- ……………『本文(一一四)西湖一周記』……………二七五
- 一 西湖西澗寺、西湖靈隱寺の石佛、西湖雷峰塔、西湖天竺寺……………
- ……………『本文(一一四)西湖一周記』……………二七六
- 一 西湖保叔塔……………『本文(一一五)名所の保存』……………二七七
- 一 李經邁氏肖像……………『本文(一一七)人及び書籍』……………二八四
- 一 蘇州運河……………『本文(一二〇)虎邱と天平山』……………二九三
- 一 蘇州虎邱寺……………『本文(一二〇)虎邱と天平山』……………二九四

- 一 蘇州天平山……………『本文(一二〇)虎邱と天平山』……………二九五
- 一 蘇州留園、蘇州寶帶橋、蘇州楓橋、蘇州寒山寺……………
- ……………『本文(一二一)留園と寶帶橋』……………二九八
- 一 曲阜洙水橋……………『本文(一二三)孔林』……………三〇五
- 一 曲阜孔子墓……………『本文(一二三)孔林』……………三〇六
- 一 曲阜顔子廟と虎皮松……………『本文(一二四)大成殿』……………三〇八
- 一 曲阜孔子廟大成殿……………『本文(一二四)大成殿』……………三〇九
- 一 泰山第一門……………『本文(一二五)月夜の登岱』……………三一三
- 一 泰山の石磴……………『本文(一二五)月夜の登岱』……………三一五
- 一 泰山石經峪、泰山中天門、泰山廻馬嶺、泰山の絶頂を望む……………『本文(一二六)漸入佳境』……………三一八
- 一 泰山絶頂の無字碑……………『本文(一二七)絶頂の大観』……………三二一
- 一 唐玄宗帝の紀泰山銘……………『本文(一二七)絶頂の大観』……………三二三

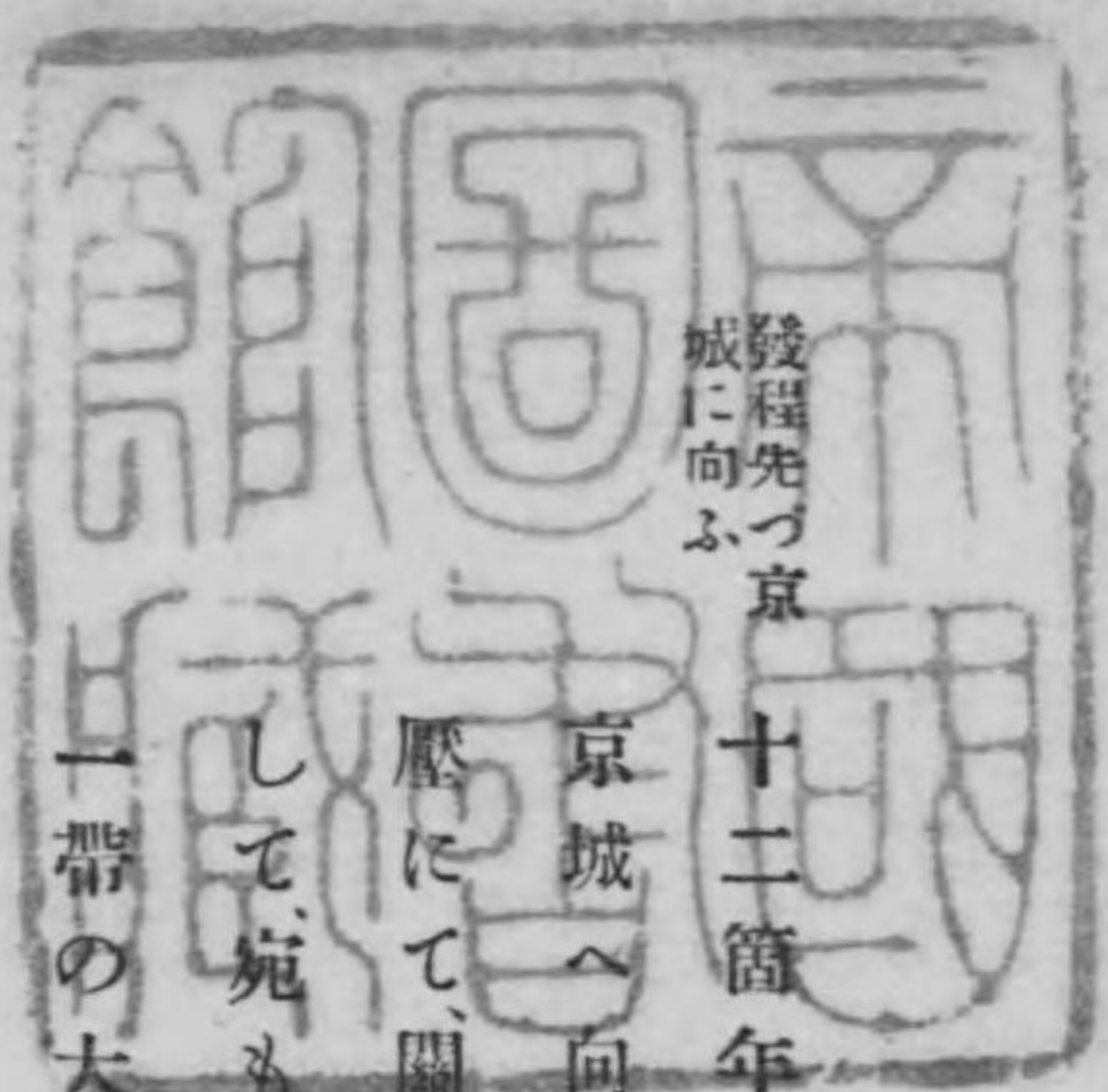
- 一 泰安府岱廟、岱廟の漢柏と唐槐『本文(一二七)絶頂の大観』……………三二五
- 一 山東督軍張懷芝氏肖像……………『本文(一二八)濟南』……………三二九
- 一 濟南千佛山見物の轎、千佛山の石佛、大明湖の歴下亭、黄河の鐵橋……………『本文(一二九)濟南と山水』……………三三二
- 一 博山一輪車……………『本文(一三二)濟南より博山』……………三四〇
- 一 博山孝婦河の顔氏廟……………『本文(一三一)濟南より博山』……………三四二
- 一 青島獨逸の舊砲臺……………『本文(一三四)カイセルの功德』……………三五二
- 一 勞山……………『本文(一三五)勞山の快遊』……………三五四
- 一 勞山老君廟前の午餐……………『本文(一三五)勞山の快遊』……………三五六
- 一 恭親王と蘇峰學人……………『本文(一三六)支那に於ける最終の日』……………三五九
- 一 西京丸甲板上の蘇峰學人……………『本文(一三八)興未闌』……………三六六

支那漫遊記目次終

禹域鴻爪錄

東京より京城

(一) 玄洋韓山



發程先づ京
城に向ふ

十二箇年目に、支那漫遊を思ひ立ち、大正六年九月十五日を以て、先づ京城へ向け發程。東海、山陽、夢裡と雨中とにて通過せり。先日來の低氣壓にて、關釜間の航海も、險惡の由聞たるに、十六日の夜は、玄洋波平にして、宛も壘の上を行くに似たり。十七日の曉、甲板上に出づれば、釜山一帶の大陸は、薄靄輕煙の中にあり、正に是れ一幅淡墨の山水圖也。海風に面を吹かれつゝ、佇立すれば、東方曙雲、霧地に劈かれ、旭日波間に湧き、天地を一時に眞紅に染め出せり。

金輪湧出水
天紅

韓山一抹淡烟中。秋入玄洋冷曉風。誰點動機驚靜境。
金輪湧出水天紅。

鵲巢居に行
李を安頓す

釜山にて無佛居士と出會、熟路終日南大門に著すれば、端なく宗演老漢の吾を待つあり。對談片時、先づ京日社に立寄り、白雲洞なる鵲巢居に、行李を安頓したるは、既に午夜を過ぐ。曉來夢破るれば、近時の降雨にてにや、床下の鳴琴溪も、泉聲特に高調し來りたるやに覺ゆ。

大正六年九月十八日午前十時、只今宗演師の支那行を、南大門停車場に送りて、京城日報社にて

(二) 雨 又 雨

京城到著以來、雨又雨。病後の靜養には、詭へ向也。但だ散歩が出来ぬ丈が閉口のみ。

早魃と秋雨
の來襲

當地本歳の早魃は、異常なりと聞く。先年西大門外の愛吾廬より、南山麓舎に移植し、更に同所より、當鵲巢居の臥雲台石の畔に轉栽し、爾來秘藏娘同様に、愛護を加へたる公孫樹さへ、枯死したる也。されば秋雨

來襲と與に、半死半生の草木は、何れも皆な蘇生の狀をなし、新芽を吹き返しつゝあり。宛も是れ殘秋の季節に、新緑を見る心地す。

枕頭添得水
聲多

溪雲漠漠擁庭柯。石逕苔深少客過。蕭瑟茅齋三日雨。

枕頭添得水聲多。

三日といへども實は二日也。併し枕頭の泉聲は、實にすさまじきものなり。朝鮮の秋は、今ま三週間の後にある可し。本年は杏花の前に京城を去り、紅葉や、野菊の前に京城に來る。人事意の如くならざるもの、概ね此の類也。せめて明日の快晴を祈るのみ。

大正六年九月十九夕 京城鵲巢居に於て

(三) 世界晴の好天氣

果然喜鵲晴
を報ず

果然喜鵲晴を報じぬ。九月二十日は、朝鮮晴と云はず、日本晴と云はず、真に世界晴の好天氣也。試みに北門の上に立て眺望すれば、實に左の

詩の如し。

四

詩興高兼秋色飛。南山漢水帶晴暉。舉頭試向青天問。
昨日陰雲何處歸。

恩平面の小
松原

此に於て結束して、北門を出て仁王山の裏を廻りて、北京街道より恩平面の小松原に赴く。今春に比すれば、水害の爲めに、道路險惡となるのみか、水門橋の如き、其の目鏡の二個迄も破壊せり。而して其の巨大なる石材は、何れも一町餘の下流の沙中に、埋没し居れり。楓葉尙ほ青く、野菊未だ綻びず、山野、郊垌の光景も、寧ろ寂寞たるを免れず。但だ一碧極目、寸翳を剩さざる青天井を眺め、松林の下に仰臥したる丈が、眞に快活事のみ。昨秋來遊の節は初茸、しめじ茸の類、殆んど爛熟し居しに、本年は其の片影もなし。昨は晩に失し、今は早に失したるが爲め耶。茸狩の爲めに用意したる籠には、撫子の殘花杯採拾せり。本日も昨日に劣らざる晴天也。

一碧極目松
林の下に

大正六稔九月廿一日朝

(四) 漢江舟遊

蘆島の農事
試験所

當地に於ける用事、概略片附きたれば、二十三日は、無佛居士の案内にて、朝銀の自動車に便乗し、蘆島の模範農事試験所に赴き、林檎、梨、葡萄等の馳走に預りたり。昨年の大寒と、本年の大旱とは、近來に於ける朝鮮菓樹界の二大厄難にて、流石の模範所も、此には閉口し居れり。但だ折角の珍味も、病後の拙者には、快喫、飽喫する能はず。何となく寶の山に入りつゝ、手を空しくして還るの心地せり。それより扁舟漢江に溯り、奉恩寺に赴けり。蘆島は漢江の右岸に於ける部落にして、上流より筏にて降り來る薪や、材木や、其の大半は、此處にて取引する由。其筏は洞庭湖上のそれに及ばざるも、二三十人位は其上に乗り得る、彪然たる一大怪物も見受たり。

扁舟漢江に
溯る

五

乘興欲銷千古憂

乘興欲銷千古憂。扁舟一棹去悠悠。雁聲未到堤楊翠。

六

微雨澹雲清淺秋。

一時早魃にて、枯死せんとしたる植物、何れも秋雨の爲めに、新芽を出し、漢江の白沙を劃する堤上の楊柳が、即今翠色を帯び來たるも、偶然ならず。此邊隨處、子供等が畑に立ちて鳥を追ひつゝあり。其の呼聲甚だ面白し。而して横著なる村雀の群は、彼處に追へば、此處に避け、此處に追へば、彼處に避け、宛も子供を玩戲ふものに似たり。

奉恩寺

奉恩寺は、先づ百姓家の大なるものと見れば可也。和尚は先日吾社樓上にて會見したる、朝鮮觀光僧群の一人にして、未だ歸來せず。本日は日曜にて、遊山遊水の好時なるも、天氣模様にて、先づ五割引と可謂乎。併し吾等は、頭上點々の雨痕にて、先づ仕合なりき。

大正六稔九月廿四日朝 京城鵲巢居に於て

(五) 分 外 清

健康恢復

京城滯在本日を加へて、一週間用事も片付き、病餘の身體も、聊か恢復を覺えたるを以て、本夕より奉天に向け出立す。同行三人、予及び秘書山崎猛、國民新聞記者玉生武四郎兩氏也。

鵲巢居は第一の安樂窩

我が鵲巢居は、其名の示す如く、眞に鵲巢のみ。身體と、書物と、行李と、雜居すれば、他人は足を著くるの餘地なき也。然も是れ予に取りては、第一の安樂窩也。方丈の寢室に横はりて、半夜に床下を流るゝ泉聲を聞く時は、何となく天樂を聞く心地せり。今更ら此の泉聲に別るゝが、何となく名残り惜しき也。

聽到今宵分外清

本年はダリヤは、餘りに肥大にして、出來損せり。コスモスは、今更僅かに星の如く、三々五々開輪せるのみ。紅葉には、尙ほ三週間早し。庭前、屋後、唯だ咲き残りの松葉牡丹と、今を盛りの蝦夷菊あるのみ。

七

何日閑身事退耕。忽來倏去豈無情。鳴琴峽下潺湲水。
聽到今宵分外清。

鳴琴峽とは、予が寢室の下を流るゝ溪澗の雅名也。

大正六年九月廿四日午後六時 鵲巢居に於て

京城より奉天

(六) 京城を發す

鵲巢居出立

九月二十四日、半輪の月光を頭上に仰ぎ、滿地の鈴蟲、蟬蟲の聲に送られ、愈々鵲巢居を出立せり。北行車中、非常の雜沓、代議士諸君も少からず。一睡直ちに定州に至る。

多望なる
業の將來

予が數年來繰り返したるが如く、朝鮮の大なる將來、多望なる將來、有爲なる將來は、實に鑛業に在り。今や三菱氏兼二浦に據り、久原氏鎮南浦に蟠り、前者に製鐵所あり、後者に製鍊所あり、互ひに犄角の勢をなしつゝあり。其他三井、古川、安川、藤田、大倉の諸富豪、何れも指を朝鮮に染めつゝあり。米國鐵材禁輸の如きは、寧ろ我に取りて一時の損はして、多年の得たらんも、未だ知る可からず。要は唯だ我が同胞の努力の

鑛業に次で
は農業と水
産

如何にあるのみ。
予は友人松山常次郎氏の設計に成る、十三里の水道を開鑿して、龍巖浦附近に、六千町歩の水田を開墾したる、快事業を見物す可く誘はれたれども、豫定の日程ありて、之に應ずる能はざるを、遺憾としたり。鑛業に次では、農業也。而して又た水産也。朝鮮豈に永く久しく貧弱郷にして止まん哉。

(七) 鳴緑江の大鐵橋

鳴緑江鐵橋

新義州にて態と下車し、此れより支那苦力の人力車に乗り、鳴緑江の鐵橋を渡る。汽車にては見物が思ふ様にならざれば也。

龍の如く大
陸と半島と
を接続

予が三十九年初夏、支那漫遊の節は、京義線は、一等もなく、二等もなく、全くの軍用車なりき。四十四年來遊の節は、恰も江心に橋柱を築き上げつゝありし也。今や延長三千九十八呎の長鐵橋は、龍の如く大陸と、



(右)人學峰蘇の上橋鐵大江綠鳴

半島とを接続す。中間は汽車線路にして、兩側は人及び諸車を通ず可し。而して中央に於て開閉機あり、船舶の上下交通を便にす。橋半の欄干に倚りて

千萬無量の
意溢あり

望めば、義州統軍亭は、阿那の丘上にあり。而して安東の市街家屋は、半は丘陵を擁し、半は水涯に在り。只だ此の一水の爲めに、其の兩岸の山水、人物、即ち天然も人も、別様の感あり。然も只だ此の一橋の爲に、此の別様なる天然と、人とを、打て一丸と做さずんばあらず。嗚呼此の鐵橋

安奉線 橋頭驛附近の高梁畑



安東縣大和町



安奉線 釣魚臺



安奉線 鷄冠山驛に於ける蘇峰學人 (左端)
と東邊鎮守使 馬龍潭氏 (中)

や、千萬無量の意義ありと云ふ可き夫。

大正六年九月廿六日朝 奉天にて

(八) 安奉線

感あり
今昔の

予は三十九年に乗りたる玩具的輕便鐵道と比較して、今日の安奉線に乗り、轉々今昔の感なき能はず。當時は種々の危険と、面倒とに加へて、二日にして漸く奉天に達せり。今は僅かに半日餘のみ。然も慾を云へば、滿鐵は寧ろ此の裏街道を、餘りに輕視したるにあらざるなき乎。食堂其他一切の設備、及び乗客の取扱に於て、聊か京釜線に劣るものに似たり。今や鮮鐵又た滿鐵の支配下となる。此際須らく刷新を要す可し。從來大連本位の滿鐵に於ては、裏街道たるも、若し奉天本位とせば、表街道と云ふも不可なし。墜道又墜道。風光は山腹、山巔を蛇行したる舊線の方、寧ろ悦ぶ可し。

秋色漸く深し

然も今や秋色満洲に満つ。北上するに従ひ、秋色漸く深し。高粱は半ば收穫せられ、山葡萄や、蔦は錦を染め、野菊の淺紫、深黄なる、楊柳の尙ほ未だ翠色を帯びたる、檜や、柞葉の疎黄なる。滿眸の光景、身は既に滿洲の秋の、一要素となりたるの感あり。

本溪湖の溶鑛爐

本溪湖に至れば、巨大なる溶鑛爐の烟突、天を摩するあり。即今五萬噸の鐵を製し、明年に至らば、更に五萬噸を加ふ可しと云ふ。而して其の採炭の業、又た甚だ熾也。大倉翁の男爵を贏ち得たるも、此に於て聊か理由ありとは、同車中の諸客の相語る所にてありき。斯くて旭日よりも尙ほ鮮美なる落日の、渺茫たる滿洲平野に没するを眺め、奉天に著したるは午後六時半、東京時間にては七時半也。何となれば安東縣にて、一時間繰り上げたれば也。

大正六年九月廿六日午前六時、奉天大和ホテルの樓上より、舊式の馬車鐵道の市街を往來するを眺めつゝ。

(九) 清朝の興廢

見物日和

九月廿六日、宛も是れ見物日和也、北陵に赴く。北陵は昭陵と申して、清朝の太宗文皇帝の永眠所也。奉天より一里の北方にあり。一望平原、只だ秋氣に飽きたる高粱の、風に戦ぐを見るのみ。

北陵の觀更に荒廢

北陵の觀、十二年前に比すれば、更らに荒廢す。昔時は遠方より遙拜したる、遺骸安置の土饅頭の上にさへ、今は勝手に登り得可く、小徑さへ出で來たり。但だ太宗の愛馬を彫刻したる、大白小白の二石馬依然たり、康熙帝の御撰にかゝる、太宗功德碑依然たり。明と五十八戰して皆な捷ち、中原の諸將戈を倒して、迎へ降りたる往時を懷想すれば、今日の荒廢は、真に一掬の涙なきにあらず。然も守陵の者、徒らに客に向て、案内料を強請する以外、何等の掃除も取締もせず。碧瓦黄甍、皆な人の掠め去るに任せ、寢宮の邊、陵門の傍、野菊亂れ咲き、其の寶域の周壁の

北陵拜殿



北陵道に蘇州人學峰立



北陵太宗皇帝の土饅頭



北陵太宗皇帝愛馬の石像

無名野草滿昭陵

上を行けば、宛も野徑を辿るが如く、無名の秋花、秋艸狼藉、脛を没するの状あり。而して陵を圍む隆業山中の老松と、老榭とのみ、纔かに古の名残りを留めぬ。然も此中にて山葡萄や、蔦や、何れも我が物顔に秋の誇りを示せり。

風雲遼北想龍興。 隆業山松翠黛凝。 石馬無聲空廟寂。

無名野草滿昭陵。

大正六年九月廿七日期 奉天に於て

(一〇) 前進 一步

奉天は南滿經營の中心

奉天は今や漸く、南滿經營の中心點たらんとしつゝあり。今春以降、頓に活氣を加へ來りつゝありとは、間違なき話ならむ。内地政府の一步前進は、在外邦民の百歩の前進を意味し、一步退却は、百歩の退却を意味す。

制度の罪乎
人物の罪乎

徹底的に實
行するの力



奉天 天 停 車 場

一六
制度の罪乎、人物の罪乎。是亦た考へ物ならむ。將た又た制度變ずるも、徹底せざれば、其効薄し。滿洲に於て、既に特殊の位置を、世界列強より識認せられたる我國は、今少しく根本的に、世界の期待に應ずるの施設なき乎、否乎。
予は滿洲に來りて、愈々力の福音を信ず。固より暴力にあらず、我が經綸を徹底的に實行するの力也。而して今日の急務は、其力の統一にあり、集中にあり、而して又發揮にあり。

以上は謎に似て謎にあらず。一遍通りがりの旅客にさへも、斯く觀察せらるゝ也。

大正六年九月廿七日朝 奉天に於て

石井、ランシング協商の成立したる今日、一層其の切要を感ず。

大正七年三月廿六日

著者

(一一) 瀋陽の秋色

宮殿の見物

九月廿六日午後は、城内の支那街を経て、宮殿見物に赴けり。門外には張作霖の兵隊、三々伍々立ち並び、門内には又た一、二、三、四の掛聲勇ましく、調練を爲し居れり。

肝腎の寶器
は空蟬の脱

宮殿は意外にも、掃除行き届き居れるも、肝腎の寶器は、袁爺の爲めに北京に運び去られ、今は空蟬うつせみの脱だつせみなり。四庫の一なる文溯閣杯も、只だ建物のみ残りて、書物は一卷もなし。予は寧ろ十二年前の、塵埃滾々

殿政崇の内殿宮 天奉



藏寶の寺黃 天奉



外郊の天奉



塔西の寺壽延天奉
子輝の製磚

人在瀋陽秋色中

裡の内容豊富時代が戀しき心地す。
予は今更、曾て清朝歴代の聖容を奉安したる、鳳凰樓の傑閣の上より、
奉天全市、及び其の附近を眺望して、夕陽無限好。唯是近黄昏の感なき
能はず。

白塔亭亭挿碧空。高粱滿地動金風。乾坤寥廓清如許。
人在瀋陽秋色中。

黃寺の佛殿
と一切經

白塔とは、延壽寺の西塔を云ふ。輒塔をば白く塗り、而して其の輒面に
は、巨大なる唐獅子を浮き彫にし、亦見る可きものあり。黃寺を訪ひ、蒙
古僧の大喇嘛に會見す。漸く商量して、佛殿の扉を開きぬ。予は豫て此
處には滿文金泥、蒙古文紅字、西藏文黒字の一切經ありと聞きしが、宛
も佛壇の側に、若干是れあるを見出し、之を披き覽んことを求めたる
に、主僧は首を掉りて、高僧善智識にあらざる限りは、之を許さずとて
應せざりき。往時露軍占領の際、是等の經文を亂暴にも、筵席に代用し

たりと云へば、主僧の羹に懲りて膾を吹きしも、理由なしとせず。

大正六年九月廿七日期 奉天に於て

(二二) 張 督 軍

張督軍に面會

奉天にて見物に値ひするは、北陵と張作霖也。兎も角も張督軍には、軍事顧問菊池大佐の紹介にて、面會せり。豫て馬賊の親方にて、手^てから銃殺の刑を行ふ程の荒男と聞き、定めて水滸傳中の人物らしからんと思ひたるに、嚴めしき轅門を推し開き、衛士銃劍の裡を、三回もくゞりて、應接間に入ると間もなく、ピョロ／＼然と小男入り來り、握手せり。予は果して督軍其人なるや、否やを知らず、座定まりて通譯に聞き、始めて其人たるを知れり。打見たる所にては、瘦肉黃面、寧ろ支那大官流の大黒様然たる福相とは、正反對と可申歟。眼細く、人と對話する時には、正視せず、稍や横に向く風あり。聲極めて小、但だ眼に底光りあり、聲

張督軍の風采

總督先生忠告



張作霖

奉天督軍張作霖氏肖像

二〇
に抑揚あり、顔面
稍や緊張の風あり。
而して談話の際に、
往々佗の急所を衝かんとするの
機辯あり。又た汝は
汝の思ふ如く思へ、
我は我が行ふ如く行は

怖獨病と獨露同盟

んと云ふが如き趣ある點に於て、聊か這漢の本色を見る可き歟。談話の要領は、今ま茲に掲げず。彼は怖獨病に罹り、獨露同盟して、北滿より直下し來らば奈何抔と語り、且つ日本政府の態度の曖昧には閉口すとて、頻りに怨言を漏らせり。聞く盛京一省の經費約一千萬圓、而

野望の督軍

して其の七百萬圓は、軍事費なりと云ふ。彼は萬事を差し置き、唯だ兵を養ふを主要と爲せり。而して其兵が國家の兵にあらずして、張其人の私兵たること勿論也。彼はやがて吉林の孟督軍、黑龍の鮑督軍を操縦して、自から東三省の雄鎮となんとするの、野望ある可し。而して其の結局果して如何は、未だ猝かに斷言し易からず。彼は今尙は四十三歳の、分別盛りの壯年なれば也。

大正六年九月廿九日 哈爾濱東洋館にて曉鷄の聲を聞きつゝ

豫想の如く、彼は即今愈々發展しつゝあり。彼の兵士が燕京の附近に薄りて、馮總統を威嚇したるが如き其の一證也。

大正七年三月廿六日

著者

奉天より哈爾賓

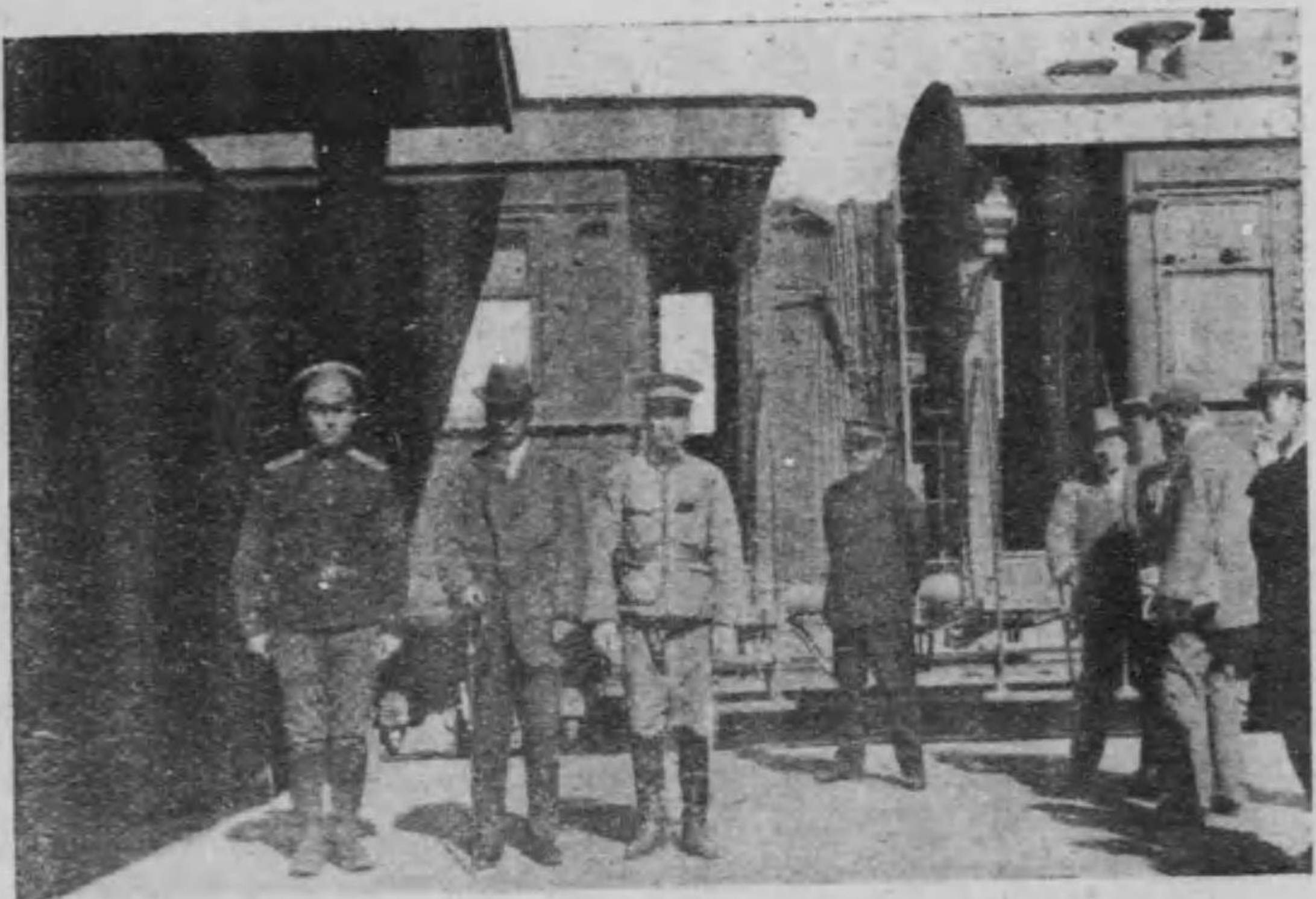
(一三) 奉天より長春

哈爾賓行の急行車に上る

九月廿八日午前一時半、秋氣凄々たる月光を浴びつゝ、哈爾賓行の急行車に上る。一睡覚め來れば、旭日杲杲として、滿洲の平野より生じ來るを見る。滿地の高粱、滿地の大豆、而して偶々白楊の蕭疎として立ち、榆樹の灌木の如く叢生する間に、泥土にて平たく家根を塗り、其の四壁には、嚴重なる土塼を立て廻したる、家屋の點在するを見るのみ。九時半長春に著す、只今にては、此處が南滿線の極北端也。小憩一時半、此處より東清鐵道に乗り移る。而して此處にて、一時二十三分時計の針を繰り上ぐ。蓋し露時也。長春停車場は、日本の南滿鐵道經營に際し、新設したるものにして、露國には一哩半を隔て、寬城子停車場あり、其

長春停車場

長春の繁昌



長春驛 中央蘇峰學人 右支那警 左露國巡査

の聯絡線は、迂回して、交互接続す。旅客は此處にて乗り換へ、貨物は寬城子にて移し換ふ。事極めて面倒なれども、今日に於ては、致方なき也。

長春停車場の客と、貨との運賃、一年約七百萬圓、其の輸送物資の價格は、約一億圓にも上るならんとは、長春驛長の語る所也。其の繁昌想ふべし。

大正六年九月廿九日朝
哈爾賓に於て

(一四) 東清鐵道

政治的勢力
の實物教育

予は如何に政治的勢力の、人間生活上に偉大なる影響を與へつゝあるかの、實物教育を、長春と、寬城子との、兩停車場にて得たり。

寬城子の光
景

中間二十町を隔て、互ひに相望む。然も前者は一として、日本式ならざるはなく、後者は一として、露國式ならざるはなし。寬城子に來れば、急に露國に入りたる心地せり。驛前の飲食店に於ける、黒パンや、肉の大塊を入れたるスープや、販賣店の露國小説や、露人の小供等が、素足の儘、泥まみれにて遊戯しつゝあるやら、便所の不潔なるやら、而して革命政府の巡查が、赤布を腕に纏ひつゝ、威張り居るやら、獨活の大木然たる軍人の難沓やら、皆自然らざるはなし。

東清鐵道と
露國威信の
下落

東清鐵道は、露國內の秩序紊亂の割合には、其の秩序を維持し居れりとの評判なれども、從來滿鐵に對して、極めて不服なる者も、東清鐵道

に乗り込みて、始めて滿鐵の難有きを覺ゆるなる可し。寬城子の停車時間、約四十分、此れは旅券調べの爲めと云ふ。其の仰山にして、物々敷加減、寧ろ支那人さへも、呆殺せんとするの概あり。今や中華民國の相庭は、銀價程に騰貴せざるは勿論なれども、露貨の下落は、宛も露國威信の下落を、徴證するに足るが如し。

何等事務的
統一なし

車内の不潔、無秩序なるは勿論、銃劍を著けたる兵士が、車内を警衛するが如きは、姑く措き、切符の取調べ、杯に、係員の車内往反の頻繁なる何等事務的統一なきに似たり。而して南滿の停車場の在る所必ず人家あるに比して、東清停車場は、時に唯だ荒漠の野に孤立するを見るのみ。其の荒廢の狀、人をしてウイッテ當時の盛華を想望し、其人存すれば、其政舉り、其人亡ぶれば、其政衰ふの眞理を、痛切に感せしむ。

大正六年九月廿九日朝 哈爾濱に於て

(一五) 滿洲の落日

長春以北の秋色

予は奉天に於て全然冬支度せり、然るに長春以北の車内、食室には、煽風器を搖がしつゝあり。但だ北上する毎に、秋色の愈々深く、愈々老ゆるを覺ゆ。第二松花江の鐵道通過の際は、窓を鎖すの例ありと聞き及びたるも、さる事もなし。此邊一面の沼澤也。而して白茅、黄葉、坐ろに秋思を催さしむ。此れより漸く小麦の已に寸青を抽づるを見る。滿洲の地味は、北に向ふ程、愈々豊沃なりとは、必ずしも誣言にあらざるに似たり。刈り取りたる高粱の畦は、一畦にして一哩以上もあらむ、大なる地面に於ける、大なる仕掛の農作は、必然の結果也。滿目の平原、茫々として大海の如し。其の時に岡坡の悠長に起伏する、宛も大海の大うねりの如し。而して落日の漸く地平に下らんとする、初めは半天に琥珀色を劃し、次ぎには黄金色となり、而して最後に眞

滿目の平原大海の如し

富岳の日出と滿洲の落日

紅血の如し。眞に美觀也、壯觀也。返すくも滿洲の落日は、何とも云はれぬ絶景也。然も富岳の日出と、滿洲の落日との優劣に至りては、世上必ず議論あらむ。予は此の落日と與に、始めて哈爾濱に入れり。

大正六年九月廿九日朝 哈爾濱に於て

(一六) 畫龍點睛

愉快且有益の一日

九月廿九日の一日は、最近二週間の旅行中、最も愉快に、且有益に暮らしたる一日也。而して是れ哈爾濱に於ける、正金銀行出張員諸氏の好意による。予は先づ茲に、一言謝辭を申し陳べ置く。

露國極東經略の策源地

哈爾濱に就て語らんには、一卷の書物も、尙ほ不足す可し。蓋し此地は、露國が極東經略の策源地として、故らに製造したる都府にして、然も其の見當は全く外れざりし也。此地は松花江を擁して、吉林、黑龍兩省

に跨り、南面して盛京省を制す。眞に是れ東三省の上游に據り、其の咽喉たり。而して更らに東に沿海州に接し、西に蒙古に連る。正に是れ四達八通の地點にして、平時には物資聚散の中心點たる可く、戰時には兵站基地たる可し。若し東清鐵道の布設が、露國の極東經營に、龍を畫きたるものとせば、哈爾賓の設置は、其の點睛とも云ふ可かりし也。而して若し露國が調子に乗りて、濫りに朝鮮に手を出し、日本を挑發して、事を構へざるに於ては、哈爾賓の主要の位置たる、今日よりも更に十倍したらんも、未だ知る可らざりし也。

地理上特殊位置は依然

ポーツマス條約の結果、長春以南日本に割讓せられて以來、哈爾賓は或る意味に於て、其の出口を防がれたるの狀なきにあらず。忌憚なく云はしむれば、露國側に取りては、軍事上に於ては、十中の八、商事に於ては、十中の五の價值を失墜したり。然も其の地理上の特殊位置は依然たり。況んや依然西伯利大鐵道の交叉點にして、東は、ボクランニ

チナヤに於て、烏蘇利本線に接し、以て浦鹽港に達し、西は滿洲里に於て、西伯利本線に連り、而して南方直下長春に於て、我が南滿線に續き、世界的大道路の要衝たるに於てをや。

大正六年九月三十日朝 哈爾賓に於て

(一七) 人造的市街

哈爾賓は人造的市街

哈爾賓は全く人造的市街也。而して其の舊市街と稱するものは、東清鐵道布設の當初に成りたるものにして、今は殆ど零落の極に達せり。所謂新市街は、中央の高地を占め、東清鐵道會社を中心として、出で來りたるもの、諸官衙、學校、寺院、病院、及び會社、商店等にして、宛然一個の露國式市街を成せり。埠頭區は高地を隔て、新市街に對し、松花江に沿うたる低地に、出で來りたるもの、乃ち商業區域也。而して別に支那人の集りて市街を成す、傅家甸あり。一口に哈爾賓と稱するも、實は

四區の總稱

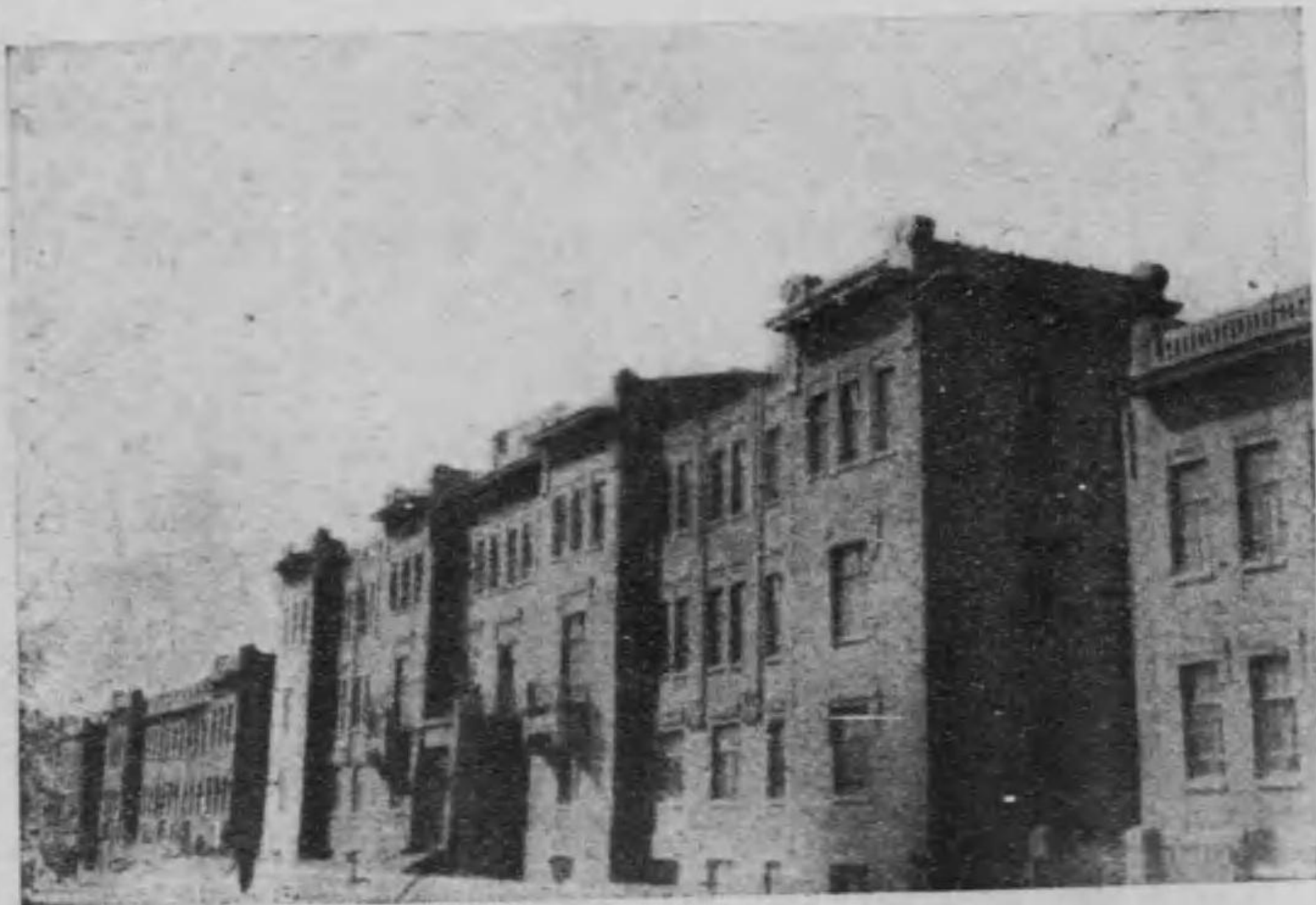
無遠慮の支那人種

以上の四區を總稱したるもの。但だ傳家句は、露國行政區域外にして、支那人の自治に一任し、全く自然生の市街と稱して、不可なからむ。而して今日に於ては、寧ろ最も繁昌の中心たるが如き觀あり。實に支那人は、無頓著の人種也、無遠慮の人種也、苟も餘隙さへ見出せば、何時にても這入り込むを、遲疑せざる人種也。或る意味に於ては、露國は支那人の爲めに、一の商業地を經營して、之を寄贈したりと云ふも、不可なき也。而して是れ豈に單り露國のみと云はん哉。哈爾賓は三人種の雜居地たり。其の割合は、支那人其五を占め、露人其四を占め、日本人其一を占むると云ふ可き歟。併し是は統計的數字にあらず、旅客の目に映じたる印象也。

大正六年九月三十日朝 哈爾賓に於て

(一八) 大食小能

東清鐵道廳の見物



男女商業學校

哈爾賓の東清鐵道廳

新市街の東清鐵道廳を見物す。我が遞信省に匹敵す可き大建築也。但だ驚き入りたるは、各室與に人の充滿と、廊下往來の者、群を成す事也。人或は露人を評して、彼等は三人前以上の大食者にして、半人前程の働きもせずと云へり。此れは酷評ならんも、露人の能率の低下なるは、恐らくは支那人の好敵手たらむ。轉じて東清鐵道の經營にかゝる、男女商業學校を見る。校長丁寧に案内し、授業室やら、標本室やら、體

操場やら、食堂やら、あらゆる方面を引き廻せり。概して露國流儀としては、清潔なりき。語學は英語と、支那語とを教ふと云へり。予は更に日本語を加へては、奈何と云ひしに、追ては然かす可しと答へたり。

鐵道俱樂部
の一人

鐵道俱樂部に立寄り、委員室に抵れば、一老人は頻りに予を捉へ、何とか露貨騰貴の方法はなき乎と、質問せり。予は笑ひながら、追てはさる事もあらむ、我が邦人にも、露貨を買收しつゝある者ありと云へば、そは騰貴せしめんが爲めにやと云ふ、否な騰貴を見越してなりと云へば、彼も亦た呵々大笑せり。目下平時我が一圓と相匹したる一留、一圓にて四留と代ふ、老人の愚痴も偶然にあらず。俱樂部にて午餐し、園中を散歩す。葡萄の葉錦の如く紅に、白樺の葉は黄に、楊樹や、榆樹の葉は青く、而して樹下、庭前、日光溫射、何となく小春日和にて、一滴の酒を飲まざるも、陶然たる心地せり。

露國極東經營
の大頓挫

露國の極東經營は、三十七八年以來、正しく大頓挫をなせり。爾來哈爾

戰爭と革命
の餘波

賓の如きも、全く其の經營を中止したりと云はざるも、其の氣勢を減殺したるは勿論。而して今や大戰爭と、革命との影響を受け、殆んど百事荒廢の姿なしとせず。而して勞兵會の勢力は、此處にも波及し、今や市の行政は、彼等の掌握する所となり、事毎に東清鐵道幹部を、牽掣しつゝありと云ふ。現に當地名物の一なる、チェリン陳列店——我が三越の如きもの——に赴きたるに、一時より三時迄は、閉鎖しつゝありと云ふ。此れは勞働時間制限の爲めにして、銀行の如きも、三時以後は必ず休業す可く、爲めに露亞銀行の如きは、毎日正味三時間位の執務時間なりと云ふ。革命黨の社會政策も、此に至りて寧ろ滑稽に近しと云ふ可き歟。

大正六年九月三十日 哈爾賓に於て

(一九) 松 花 江

松花江を溯
りて傳家甸
の見物

予等は支那船に乗り、埠頭區の盡頭より、松花江を溯り、東清鐵道の大鐵橋、三千幾百呎の下を過ぎ、傳家甸の支那街を見物せり。松花江水は、濁流混々たり。其の碇泊せる川蒸汽は、何れも外輪車にて、宛も二十餘年前、歐露旅行中のウール河の川蒸汽船を想起せり。

三四

滿洲の生命
の一

松花江は、實に滿洲の生命の一也。滿洲の富と、此の江水との關係は、揚子江と、其の流域との關係程にあらざるも、それに髣髴たるものあり。此の江水の特色は、舟楫の便、最も多きにあり。其の航行の延長、殆ど一千哩に及ぶ。而して結氷の際は、道路として、江上を運行す可し。

各種の川魚
と川鮫

予は哈爾濱の市場に於て、各種の川魚を見たり。最も偉大なるは、川鮫にして、海鮫と其の雄を競ふ。支那人が、鮑の如く曲りたる庖刀にて、之を解くの手際は、莊周にも見せ度程なりき。今や朝寢の哈爾濱も、漸く起き出でつゝあり。宿の下女、室内に入り來り、寢具を片附けんとしてつあれば、此にて泉筆を搦す。

大正六年九月卅日午前八時前十五分 哈爾濱東洋館に於て

(二〇) 革命の餘波

故伊藤公の
遭難地

九月三十日は、宛も中秋也。支那人に取りては、大切なる節季也。

午前滿鐵の莊司鐘五郎氏と與に、哈爾濱停車場に赴き、故伊藤公の遭難の模様を、實境に就て聞く。當時氏は公を距る、僅かに五六歩の間にあり、而して露人側の應接、専ら氏が擔當したりと云へば、其の語る所の精確なる、知る可し。予等は記念の爲めに、其の場所を撮影せんとしたるに、乍ち勞働者らしき二三の巨漢、何やらん故障を入れ來れり。流石露國通の莊司氏も、彼輩と議論する譯にも參らず。予等を鐵道事務所に誘ひ、此處より本廳幹部に電話にて相談し、其の許可を得、辛くも其の目的を達するを得せしめたり。莊司氏の語る所によれば、彼等は全く鐵道に關係なき勞働者にして、革命以來、頓に其の勢力を得、何時

勞働者の勢
力

三五

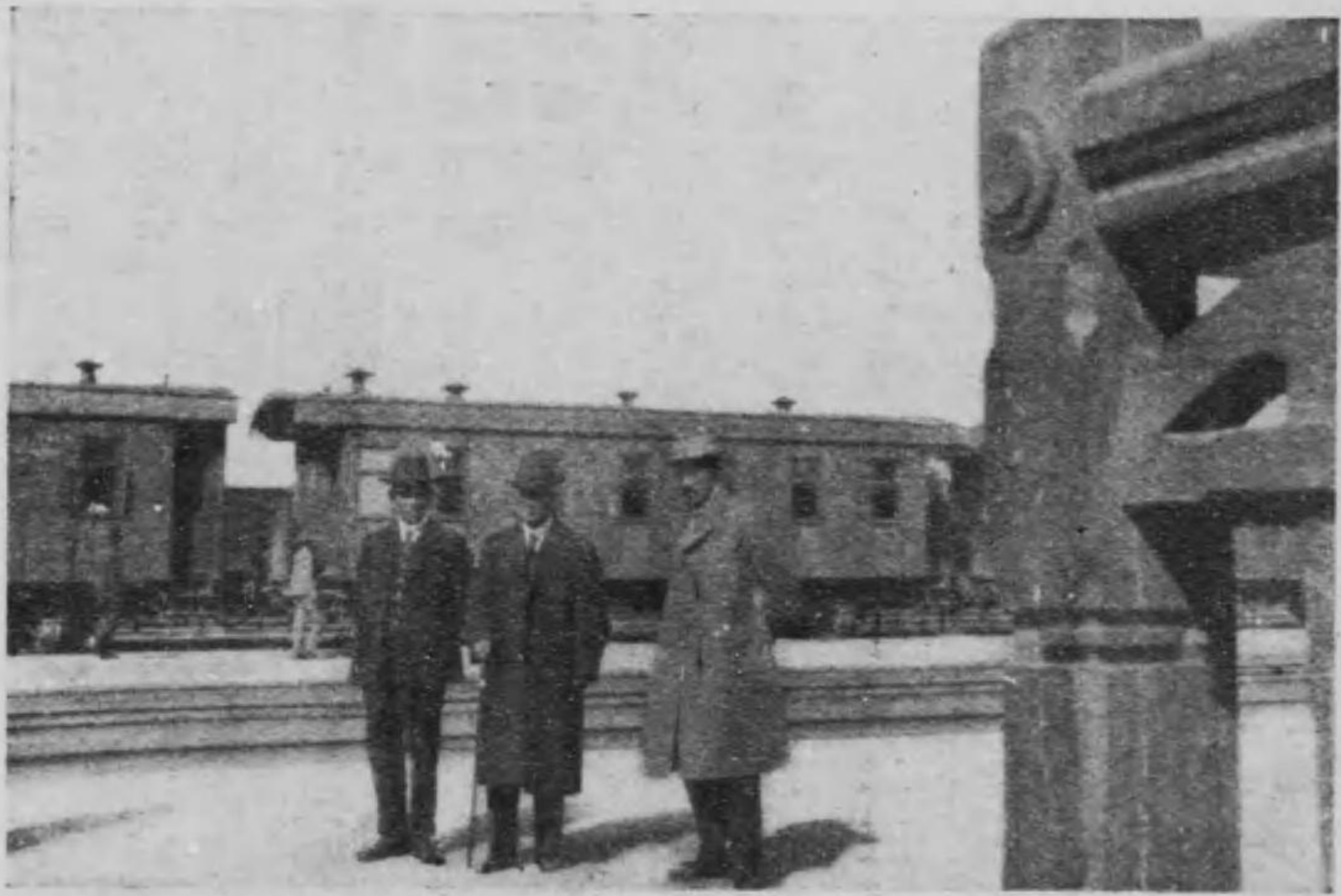
も鼻息荒く、何事にも容喙す。蓋し是れ革命の産物たる、新現象の一と云へり。此地にて斯の如し、本國の事想ふ可き也。

予等の警観する所によれば、兵士の威張りて、士官の屏息しつゝあるも亦た、新現象の一なるに似たり、街頭に於て然り、料理店に於て然り、俱樂部に於て然り。

惟ふに哈爾賓現時の治安は、我が日本の滿洲駐屯軍によりて、暗に保持せられつゝありと云ふも、不可なけむ。若し露國に識者あらば、

士官の屏息

哈爾賓の治安



(中央) 人學峰藤るて立に點地難賣公藤伊放場車停賓爾哈

之を感謝して可也。現時哈爾賓の政權は、殆んど勞兵會の實行委員の手中に、歸しつゝあるも、其の真相は、噴火山頭にあるものと云ふも、過言にあらじ。

大正六年十月一日朝 長春に於て

爾來露國の形勢は、急轉直下、今や歐露は、レニン等激徒政府の爲めに、獨逸に賣られて、單獨講和を締結し、西伯利の形勢、累卵の如く危し。而して我が帝國は雄兵を、極東に擁しつゝ、一舉手一投足の勞をも敢てせず、唯だ其の潰放四出の状態を傍觀しつゝあり、嗚呼是れ何人の責任なる乎。

大正七年三月廿六日

著者

哈爾濱より長春、吉林

三八

(二) 滿洲の中秋

予が哈爾濱に於ける感慨は、左の二十八字に囊括す可し。

戰雲猶未度
興安

松花江水杳漫漫。傑閣瑤園霸業殘。士女何關家國事。

戰雲猶未度興安。

興安は、申す迄もなく興安嶺也。

座席の競争
は一種の活
戰場

午後二時哈爾濱を發す。座席の競争は、一種の活戰場也。予等一等切符を購ひ、豫じめ宿の壯价をして、座席を占めしめられたれども得ず。僅かに二等の一室に立てこもれり。然も刻々、他の爲めに奪はれんとするの危険あれば、已むを得ず、見送りの諸君に、挨拶もそこ／＼にして、發車十五分前より、大切に我が容膝の地を守れり。然も圖々敷も、鐵道驛員

滿洲大平原
の中秋

の服を著けたる一露人は一方に割り込み、頑として動かず。種々談判の末、發車後に於て、漸く退去せり。されど其の復讐には、予等の支那人従者を、此の場所に招致したりとて、二重の割増賃を取られたり。車内の不潔は勿論、車行遅々牛の如く、各驛停車時間の長き、小欠伸、大欠伸の連發也。併し中秋の月は、未だ夕日の没せざる時より出で、第二松花江鐵橋を過ぐる頃より、月色愈々磨き來り、渺漠たる郊野、恰も大海の如く、其の高梁の月色に映ずる、波濤の如く、而して偶々人家や、小杜を見る、島嶼の如し。一碧天上の月、萬里平原の影、實に滿洲大平原の中秋は、予が生來、五十五回の中秋の中に於て、最も愉快の一たるや論なし。而して汽車窯門站驛に停るや、遙かに隱々として囃子の響を聞く、是れ支那人部落にて、中秋のお祭を爲す也。何となく我が盆踊を聯想せられて、床敷かりき。

汽車は百五十哩間を、十時弱にて駛れり。午後二時に哈爾濱を發し、長

三九

仰山なる支那人の宿引

春に著したるは、十二時前なりき。併し此處にて、時計を一時二十三分繰り戻せば、長春時間にては、十時過ぎとなる也。停車場の提灯山の如く、叫聲雷の如し。何の爲めの提灯行列にやと、出迎の人に質せば、否な支那人の宿引きと答ふ。例によりて支那人の仰山なる、驚く可き也。
大正六年十月一日朝 長春にて

四〇

(三三) 吉長鐵道

曠原如海天如水。 萬里清光雁影幽。 風露凄凄人不寢。
長春驛畔值中秋。

毎夜早寢快眠

是れ予が長春旅館に於ける、枕頭の偶成也。然も予は毎夜早寢快眠せり。旅程隨處に、宴會を謝絶するは、禮を缺くに似たれども、病後の久客に取りては、此れ以外に致方なき也。
*
*
*
*
*
*

吉長鐵道と日本の臭ひ

の經營も、滿鐵の手に委せらる可しとの説あり。(今や全く其通り實行せらる)往年福田中將は、此の鐵道は、日本の資金にて出で來りたるに拘らず日本の臭ひだにせずと、憤慨したり。されど今は聊か、其臭ひ丈は、認め得らるるに似たり。東清鐵道に比すれば、車室も比較的清潔也、係員も丁寧也



吉林土門驛

十月初一、長春より吉林に赴く。偶然にも昨夜古谷代議士と同宿、今朝又た同行せり。吉長鐵道は、七十九哩にして、其の資金の半は、滿鐵より出づ。近頃其

四一

快心の光景
に接觸

而して停車時間も、餘り長からざる也。車内にて茶を出し、温湯にて濕したる手拭を出し、何となく支那茶館に赴きたる風情あり。路は漸く岡坡、丘陵に入り、土門嶺驛より、愈々山間を紆廻して上る。一路の秋葉、必ずしも楓樹と云はず、黄紅交錯、百樹千草錦の如く、眞に愛す可し。大平原に飽きたる我等は、聊か茲に快心の光景に接觸したり。嶺を下り盡せば、松花江畔の平原に出づ。乃ち哈爾濱にて別れたる江水に、其の上流にて再會したる也。

蛇行鐵路繞林丘。遮莫風霜襲客裘。誰鑿双峰斷龍脈。

黄榆紅葉土門秋。

註 土門嶺稱有龍脈、康熙年間鑿双峰、令斷之。

(三) 去來流星の如し

吉林停車場
著

吉林停車場に著すれば、深澤領事や、孟督軍の名代や、出て迎へ、直ちに



吉林督軍孟恩遠氏肖像

馬車に拉し去らる。前衛六騎、塵埃滾々たり、予の馬車馬は、吉林第一の名馬、督軍參謀長が、頃ろ大金を投じて、購ひ得たりしものとかにて、騎兵の後を趁

孟恩遠將軍
郭吉林省長

うて飛ぶが如し。予は唯だ馬車より、彈ね飛ばされざらんことを勗めたり。直ちに孟恩遠將軍に面會す。斯人亦た卒伍よりの出身にして、歳は六十内外なる可し。張勳復辟騒動に與みし、已に身を危くしたりしも、纔かに今日に於て、事無きを得たりと云ふ。轉じて省長郭宗熙氏を

二時間内の見物と訪問



訪ふ。應接間は、立派なる西洋室にして、主人も亦た洋服の著こなし、舉動、進退、立派なる新式紳士たり。但だ支那當世流の高襟かほならざるを嘉みす可し。相伴うて北山に上る。山は松花江邊にある岡陵にして、其上に廟あり。吉林の全景、此れより俯瞰す可し。郭省長此廟に於て、清宴を張りて、予等を饗應せり。元來吉長鐵道往復の間、僅かに二時間を剩すのみ。而して此の二時間内に、見物し、訪問し、談話し、飲食し、往來す。真に流星の如し。此の短

四四

時間に、一切の満足を、予等に與へられたる、在吉林日支の官民諸君に對しては、多謝に禁へず。特に予等の爲めに、發車時間十分を猶豫せられたるは、恐縮の至り也。されど是れ下車當初より、支那官憲より好意的の發議たりしは、申す迄もなし。

(二四) 吉會鐵道

富源無盡藏

吉林は、其の一分開墾せられ、四分は未墾也。山には材木あり、礦物あり。

日本と吉林との接近

其富源は、恐らく無盡藏ならむ。若し我が北鮮の清津より、會寧に達する鐵道成就し、更らに吉會線布設の日に至り、而して敦賀清津間の、日本海定期航路出で來らば、日本と吉林との接近は、意想外の効果を來たさむ。

郭省長の人

人或は吉會線を見る、單に軍事的見地よりす。然も經濟的、拓殖的見地に於て、更らに其の大なる理由あるを、知らざる可らず。予は郭省長に

四五

對して、特に此の意味を語れり。彼は進士出身にして、湖南長沙の人、王先謙の門人なりと云ふ。明治三十一年頃、日本を見たりと云へば、其の日本に對する知識は、予が支那に對するよりも、舊なりと云ふ可き歟。其の筆翰甚だ妙。

渾身是れ塵

斯くて予等は、全速力に吉林を概觀し、薄暮長春に還れり。渾身是れ塵、予此に於て、蒙塵の意義を解せり。同行の山崎君、側にありて曰く、予等先生の後に隨ふ、而して始めて後塵を拜するの意義を解せりと、相顧みて苦笑せり。

大正六年十月二日朝 長春に於て

今や清會線落成し、剩す所唯だ吉會線のみ。

大正七年三月廿七日

著者

長春より大連

(二五) 氣持好き長春

南滿の極北盡頭

長春は即今、南滿の極北盡頭也。即ち日本勢力範圍のそれ也。之を咫尺相距る、露國の寬城子に比較すれば、一は生氣淋漓たり、他は衰殘荒廢目も當てられぬ容態也。

地勢潤遠形勝を扼す

長春は何となく、氣持好き地也。地勢潤遠、南滿と申すも、實は北滿の形勝を扼しつゝあり、而して滿鐵の附屬地は勿論、支那人市街さへも、市區井然、衢街坦々、眞に快活也。附屬地の如きは、滿鐵が明治四十年の秋、五十萬圓を投じ、百五十萬坪の荒蕪地を買収したるもの、而して今や此の繩張内のみにても、戸數二千、人口一萬二千餘を算し、紅埃紫陌の衢たり。此地に集る大豆百萬石、雜穀五十萬石を算す。



豊沃、菓樹の如きは、餘りに沃土なるが爲めに、却て成實を害すと云ふ。白菜や、葱や、其の出來榮、良に見事也。關東州の礮礮土に比すれば、人をして餘りに天然の不公平を、妬殺せしめんとす。

長春回教寺

長春の地勢たるや、東は吉林を控へ、西は洮南府に通じ、北は東清鐵道に接する以外、伯都訥に、南は奉天に連る。眞に是れ四達八通の要衝也。而して地味

(二六) 貨幣即貨物

通貨不定の標本地

長春は日、支、露三國の交叉點なるが爲めに、貨幣も一層複雑し居れり。凡そ鴨綠江を渡りて、旅客の最も不便とし、且つ奇異に感ずるは、通貨不定の一事也。而して長春の如きは、其の標本地とも云ふ可し。予は正金銀行支店に於て、之を見、其の餘りに澤山なるに喫驚せり。

通貨不定の一例

我國正金銀行の金券あり、銀券あり、朝鮮銀行の金券あり、露國の留紙幣あり。而して最も流通するは、不換紙幣の官帖にして、其の他中國銀行券、交通銀行券、殖邊銀行券の如きも、先づ半不換紙幣と申して、不可なからむ。

通貨も亦た一種の貨物

されば長春に於ては、通貨も亦た一種の貨物として、其の取引を必要とするや論なし。乃ち其の取引所に於て、一年四億圓内外の取引ありと云ふ。予等も現場を見物して、其の盛況に驚けり。而して此れと同時に

に、愈々滿洲幣制の統一の急務を認めざるを得ず。之れが爲めには、我が當局の一大猛斷と、正金、鮮銀兩行の努力を要するや論なし。

今や滿洲に於ける正金銀行は、其の營業を擧げて、朝鮮銀行に引渡せり。少くとも此が爲めに、我が金融上の掛引に於ては、若干の簡捷を加へたるが如し。

大正七年四月一日

著者

(二七) 長春より大連

始めて旅館らしき心地

予等は長春の大和ホテルに於て、始めて旅館らしき心地せり。清潔也、整頓せり、周到也、而して且つ懇切也。不足を云へば、料理なれども、是は此の地方にては、致方なかる可し。

堀内中將來

十月二日正午、南下す。堀内中將今朝、南より投宿、同夜又た南下すと云ふ、精力想ふ可し。予等を送りて停車場の歩廊に立ち、口吟して曰く、

目千里君を送りて秋高し』と、手を握りて別る。

滿鐵にも改善の餘地多し

何人も東清鐵道に乗りて、始めて滿鐵の難有きを感じ可し。但だ公平に評すれば、滿鐵にも改善の餘地、頗る多きに似たり。最惡の鐵道と比較して、自から得々たるが如きは、決して向上發展の道にあらじ。

鐵嶺と海城

車窓無聊、讀書に耽るのみ。鐵嶺にて宮崎平一君、夫人令嬢を伴ひ、辨當を携へ贈らる。三十九年の夏、熟卵と、生大根を嚙りつゝ、板間の上に寝ね、昌圖驛より大連迄、三百三十哩を、殆んど三十時間を費したるに比すれば、長春より大連迄、四百三十七哩を、二十時間に達し、然も寢臺車に安臥するが如き、轉々人をして、今昔の感に禁へざらしむ。夜半海城にて、河瀬三平君、夫人令嬢を伴ひ迎へらる。此邊予が明治二十八年戰役に際し、曾遊の地也。

東京の大風雨を聞く

車内陰晴恒ならず、始て東京の大風雨を聞く、關心頗る多し。三日曉に際し、大石橋に於て、大雷雨に遭ふ。瓦房店に到れば、天霽れ月出づ。

大谷光瑞師
の來迎

金州に抵り、南山を朝日の光りに、指點する間もなく、身は已に大連停車場にあり。予を待ちつゝありし大谷光瑞師等、來り迎へらる。予は師と相見て、悲喜交々、臻り、殆んど言ふ所を知らず、相伴うて大和ホテルに投宿せり。爾來僵臥四日、今朝漸く起床、以上三文を艸す。

大正六年十月七日午前六時 大連大和ホテルにて

大連と其の附近

(二八) 長き寢臺車

微恙の爲め
謝客困臥

十月三日より七日迄は、大連に於て微恙の爲め、謝客困臥若しくは懶臥、安臥せり。此が爲めに各地諸友より、見舞の電報を煩はしたるは、予が慚惶に禁へざる所也。七日漸く起き出で、同宿の中村都督に面し、且つ國澤滿鐵理事長、樺山理事等を訪へり。何れもへ向て、予は今朝當地に到着せしものと認められたし、此の數日間は、寢臺車に眠り通して経過したるも、同様なれば也と云へば、中には随分長き寢臺車なりとて、互に呵々大笑せり。國澤氏席上に於て、宗演老漢と三たび相見る。一たびは老漢發程前、逗子老龍庵に於て也、二たびは京城南大門に於て也、三たびは即ち此處也。老漢昨日天津より汽船にて、當地に來著し

宗演師と三
たび相見

久し振りの
外出



大連大和ホテル上り街市連大るせ町

大連貿易の
盛況

五十四
たる也。因縁良に淺からず。
久し振りに室外に出づれば、恰も
窮鳥の樊を脱したるが如し。況ん
や絶好の秋晴をや。乃ち赤毛布客
同様、市街や、公園や、埠頭や、隨處見
物す。之を明治三十九年夏の會遊
當時に比すれば、隔世の感も愚ろ
か也。縱令大連は、露人の計企を繼
紹したりとするも、之を大成した
るは、我が大和民族の手腕也。
露國時代には、一萬八千の人口に
止まりしも、今や其上に十の字を
加へて、尙ほ餘りあるに至れり。其

の貿易額の如きも、輸出入合計一億五千萬圓内外なる可し。今や二個
の埠頭に不足して、更らに第三埠頭を築造中也。其の盛況想ふ可し、而
して其の主たる要素は、滿洲大豆にあり。誰か日露戦争の當時、此の大
豆が滿洲の一大資源たるに、氣附きたるものあらん哉。

大正六年十月八日朝 大連に於て

(二九) 星が浦

星が浦に遊
ぶ

十月七日午後は、星が浦に遊べり。大連を距る西南二里許、電車あり。予
等は途中迄、自動車にて行けり。偶々鶴田樺村の、道傍に寫生しつゝ、あ
るを見附け、拉し去れり。

散歩には好
適地

天は、京城程に澄み渡らざるも、東京に比すれば清し。遼東名物の風も
なし。星が浦は、黒石礁の舊名に、日本名を附したる也。滿鐵は海濱十萬
餘坪の地を卜し、遊園的に整理し、其中にホテルあり、貸別荘あり、雅に

海色の濃厚

年弱き外國婦人

却從星浦憶湘南

して俗ならず。野菊咲ひ、コスモス開く、散歩には好適地也。而して其の灣形島容、何となく我が湘南の逗子、葉山を、髣髴せしむる者あり。但だ此處にての見物は、海色也。其の藍碧の色は、天色に比して、更に幾倍の濃厚を加ふ。此の海色は、逗子にも、鎌倉にも見るを得ざる也。小春日和にて、逍遙の際は、外套を脱する程也。されど或る年弱き外國婦人が、突如として海中に飛入り、泳ぎ出したるには、辟易せり。斯る婦人の亭主たるこそ、果報者なれ。歸途電車中にて、幾多の釣客と同乗せり。今日の日曜を機として、何れも此處に磯釣に出掛けたる也。

滿灣秋水碧於藍。帆外斜陽島影涵。吾亦江湖一竿客。
却從星浦憶湘南。

想ふに我が老龍庵の門前、老松の蔭下に來り群る沙魚も、今頃は嘸や肥えたるならむ。風に臨んで坐るに、釣魚の好時節を逸したるを憾む。

大正六年十月八日午前六時 於大連

(三〇) 大谷光瑞師

大正二年首夏の相見

予が二樂莊に於て、大谷師と相見たるは、未だ桂公の在世中たりし也。即ち大正二年の首夏、病氣保養の爲め、瀬戸内海航游の途次にてありき。當時予一首を口占して、師に贈りて曰く、

空翠染衣松徑微。清談半日世情非。歸來矯首望山上。
黑霧濃雲挾雨飛。

結句は全く實際を描きたる也。然も思ひきや識を作して、間もなく本願寺事件出來せんとは。

相面せざる三年餘

爾來師と恒に紙上に相見、心上に相見たるも、相面せざる三年餘。此の期間に於て、傍人は唯だ師が放浪の快遊を、事としつゝありと思はむ。されど師が如何に精神、物質、內的、外的の困阨と戦ひ、屈辱と戦ひ、懊惱

師は頂天立地の大丈夫

と戦ひ、煩悶と戦ひ、且戦ひつゝあるかは、今回相見ても師が兩鬢の霜に徴證せらる。師意氣自若、膂力方さに剛、抗爽、倔強、肯て人の憐れを受くるを屑とせざるも、知心者に於て、豈に一掬の同情なかる可んけ哉。師の如きは瑕瑜相ひ掩はざるの人、其の缺點は、却てより多く暴露せ



大谷光瑞師肖像

られ、其の眞價は動もすれば、之が爲め蔽沒せらる。然も總てを乗除するも、師は實に思想に於ても、見識に於ても、他の門牆に倚らざる、頂天立地の大丈

師は今尙ほ未成品

夫也、其の氣宇の大にして、其の志趣の遠に、而して學問の浩博なる、眞に現代の偉器たるに庶幾し。

人或は今日に於て、大谷光瑞師を品隲す。されど師は大なりと雖も、今尙ほ未成品也。其の猫を被りて、再び本願寺の法主となる耶。將た政界に馳驅して、一個の雄將となる耶。或は世界の行脚客として、東依西托、寧處に違あらず、天邊の神龍、僅かに殘甲、片鱗を人間に留むる、閃電的人物として、空しく世人を嗟嘆せしむるに止まる耶。或は事功に成效して、一種のセーシル・ロージとなる耶。抑々亦た神氣練熟、德量宏深、眞に所謂る第一流の法器となり、第一等の人格となり、汎亞細亞主義の大木鐸たる耶。

濟世高才無所用

以上の五者は、悉く皆な師が自から擇ぶ所に任す可し。予今回相見ても、更らに師に一首を呈せり、曰く。

不希獨棹五湖船。禍福觀來是宿緣。濟世高才無所用。

南荒自竄已三年。

六〇

然も其の用所なきは、畢竟天が師を大成し、玉成する所以の深意なりと知らずや。師自から愛惜して可也。

大正六年十月八日朝 於大連

(三一) 扇 芳 亭

大連第一の
旗亭

人皆な曰く、大連の扇芳亭は、此地第一の旗亭なりと蓋し公評ならむ。予自ら往て観る能はざるも、亭の主人岩間芳松氏は、屢々予を訪問せり。惟ふに吾が『國民新聞』と、因縁淺からざるが爲めならむ。

吾社同人の
集會所

今を距る二十六七年前、扇芳亭の東京新橋烏森にありしや、無骨なる予等は、何れも其の名物料理薩摩汁に、舌鼓を打てり。爾來明治三十八年九月、焼打事件前夜の集會に至る迄、吾社同人の集會は、概ね此處にて催されたりし也。

讀むべき二
人者

扇芳亭や、初め微に、中る盛に、而して頓挫し、更に大連に於て、大に興れり。予等當初の歴史を知るもの、焉んぞ其の今日あるを、祝せざるを得ん哉。但だ憾らくは、彼に於ては、當時の女將、已に逝き、而して吾に於ては、栗原白雲居士の墓木拱せるを。

「遼東第一
樓」と書す

岩間氏頃ろ高塹の地をトし、其の別荘を經營せんとし、書を予に請ふ。筆翰固より予が任ずる所にあらず、されど舊好辭す可らず、乃ち『遼東第一樓』の五大字を書して、其の需に應ず。彼曰く、某本年六十一歳、樂隱居望む所にあらず、錢を溜んとしても、思ふ様に溜まるものにあらず。願くは精根の續く限り、働かんのみと。予其の志を嘉みし、更らに數紙を書して、之を與へたり。彼曰く、殘念なるは、先妻を亡うて、今日あるを見せしむる能はざりし一事なりと。然り彼等夫婦は、扇芳亭帝國を樹立するに於て、實に協力者たりし也。

(三三) 老虎灘に遊ぶ

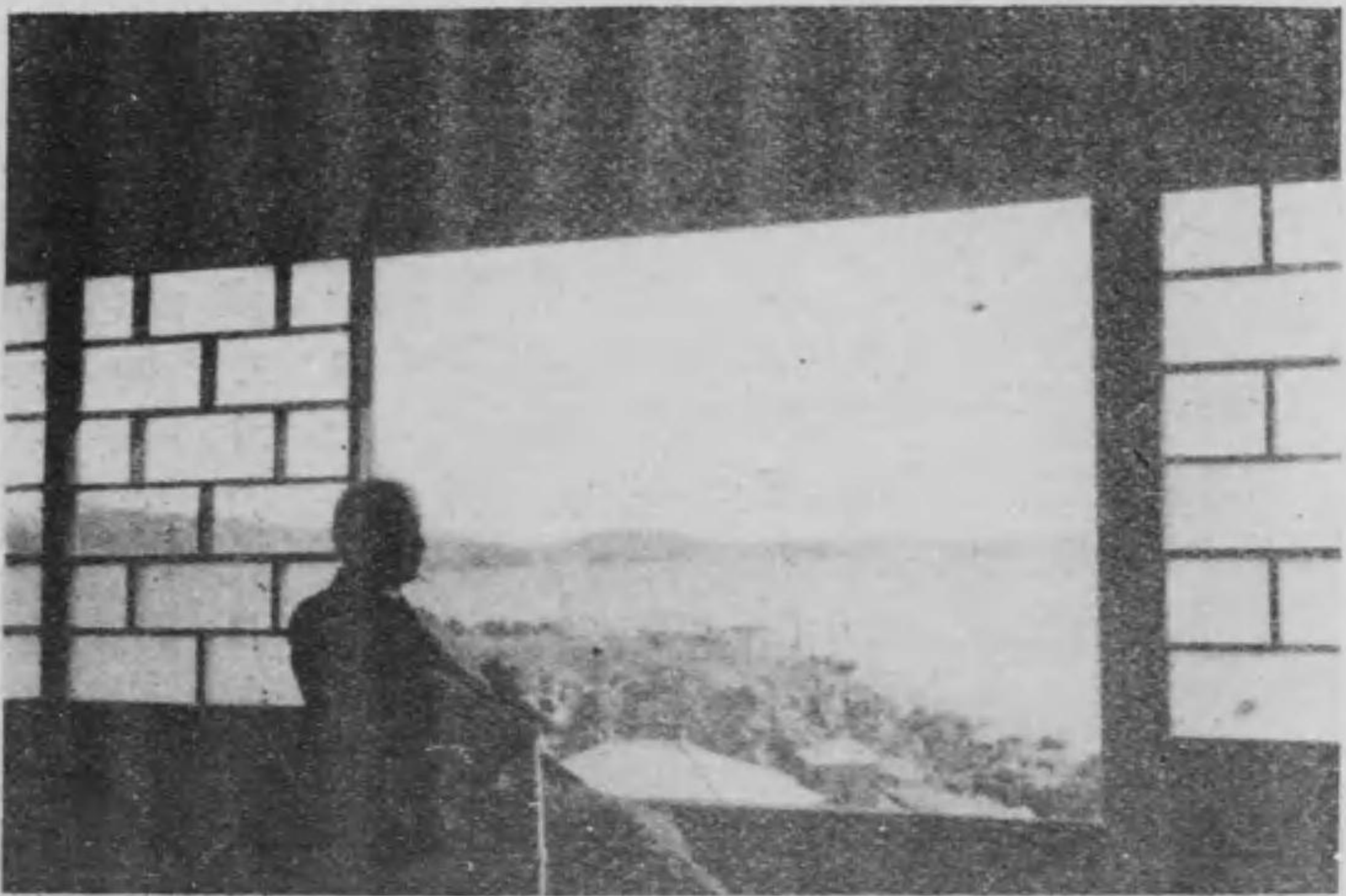
天更に清く
氣最も温

星が浦に遊びし翌日、即ち十月八日、老虎灘に遊ぶ。大連の南一里餘にあり。昨に比すれば天更らに清く、氣最も温也。途中製鹽田あり、予玉生君に告げて曰く、君鹽を作る法を識れりやと、君頭を掉うて曰く、不肖未だ詩を作るの法を解せずと。製鹽と作詩、其の相去る三百里も管だならず、相顧みて一笑せり。

海賊窟今
は海水浴場

老虎灘の稱、蓋し西方海中に突出する一岩礁、老虎の狀あるが爲めに、出で來りしならむ。古は海賊の巢窟たり、今は海水浴場たり。其の規模や、星が浦に比して小なるも、巨崑怪石の海中に起伏、亂立する、而して海水の清澄にして、明澈なる、亦た捨て難き風情あり。同行の山崎君は、三浦三崎の景に似たりと云ふ、予慙しながら、未だ親しく三崎を知らざるを奈何。

海賊窟今
は海水浴場



老 虎 灘

池には鱧や鯛の遊弋するあり、生洲より上げ來りし鮮を撃つ、亦た好下物たらざるばあらず。但だ予や病餘、飽喫する能はざるは勿論也。欄に凭りて眺望し、坐ろに吟情の生ずるあり。

老虎灘頭且倚欄。

險崖削立亂礁攢。

秋高渤海明如鏡。

幾隊遊魚水底看。

小春の天氣、何となく睡味を催はし來り、閑坐去る能はず。割引きすべきは、唯だ暖を趁うて、滿洲名物

の蠅の來り群るのみ。庭中には、ダリヤ、コスモス今を盛りと咲き出づ、
庭外一步、野菊細々、却て愛す可きに似たり。

大正六年十月九日午後六時半、晚餐の鐘聲を聞きつゝ、大連大和
ホテルに於て。

旅順の一日

(三三) 旅順に遊ぶ

四時四十分
間の見物

十月九日旅順に遊ぶ。九時二十分に該停車場に著し、二時に發す、中間
四時四十分のみ。而して此の短時に於て、一通りの見物の出來たるは、
隈部少將、及び旅順驛長久保田金平君に負ふ所多し。

訪問と處々
の見物

予等は中村都督を訪問し、宮尾長官に面會し、白玉山頭の表忠塔に抵
り、海陸の戦蹟を展望し、納骨堂を禮拜し、要塞戦記念品陳列所を見、轉
じて新市街なる滿蒙陳列館を觀、大和ホテルに於て、隈部少將の午餐
の馳走に預り、肅親王邸にて、親王と會見し、尙ほ停車場に於て、若干休
息の時間を剩し得たり。吉林に於ける二時間の見物に比すれば、其の
倍を過ぎたるも、先づ短時間相應に、要領を得たるに庶幾し。工科學堂、

今日の旅順

中學校、女學校等も、略々其の皮相を一瞥したり、要するに旅順の今日は、軍港としても、要塞としても、苟も我が勢力の満洲に存せん限りは、殆んど大なる必要を認めざる可し。今日に於て尙ほ幾許の典型を留むるは、恐らくは告朔の餼羊の類ならんのみ。但だ其地や、海灣斗入、四圍静寂、別に一天地を成し、而して潮清く、氣温也。之を教育地とし、又た保養地若しくは遊園地としては、恰も誂へ向きなる可し。今日に於ても、夏期に於ては、外國人の銷夏客少からずと云ふ、之を大連に比すれば、何となく市場より禪堂に入りたるの心地せり。

市場より禪堂に入りたるの心地

(三四) 旅順の誇り

都督官舎

所謂る都督官舎の如きは、山腹にありて、其の眺望絶佳也。予は中村都督に、別荘としては申分なし、されど都督の常住としては、定めてお淋



旅順白玉山頭表忠塔

しからんと云へば、都督も首肯して實に然りと云へり。何となく鼠にでも、引かれ相の屋舎也。關東都督が滿鐵を統裁する今日、彼は尙ほ、此の隱居所に

誇りの一表 忠塔

かゞまざる可らざるの必要ある乎。旅順の誇りの一は、表忠塔なる可し。旅順を圍繞する諸峰の中樞たる白玉山頭に、聳立する海拔六百二十三尺。其の附近に納骨祠あり。其の塔より望めば、總ての旅順は、眼中にあり。所謂る水陸戦争の地點は、殆

誇りの二旅
順驛長

んど悉く指點す可し。

其誇りの二は、旅順驛長久保田金平氏なる可し。此の老驛長は、旅順驛開始以來の驛長にして、戰跡の説明に、最も練熟す。而して自から云ふ、若し老骨を、白玉山麓、表忠塔下に埋むるを得ば、願ひ足ると。彼は戰跡を保存するに全力を盡くし、而して其の活ける教訓を、我が大和民族に普及せしむるに於て、最も熱心也。蓋し乃木大將に私淑する所ありと云ふ、或は然らむ。

坐ろに千萬
無量の感

予等は隈部少將、久保田驛長等と、表忠塔下に立ち、其の秋霽の空に、紺青の潮水が、眠るが如く静かに、而して二三の漁舟が、鷗の如く浮ぶや。赭けたる山頂に、肉眼にも認めらるゝ廢殘の砲や、十餘年の今日、依然たる蜿々蛇の如き塹壕や、坑道やを眺め、塔下と云はず、道傍と云はず、此の瘠せこけたる地上にも、尙ほ秋の装を閑却せざる、五寸にも足らぬ野菊の莖に、豆の如き黄輪を綴つり、あるを把り、坐ろに千萬無

量の感に打たれたり。

今は國運發
展の記念

回顧すれば予や、明治二十八年五月、故小松總督宮の行に陪し、筆を載せて此地にあり。偶々遼東還附の報を得て、憤慨に堪へず、僅かに海濱より、一掬の沙礫を撮り、之を手巾に包み、是れ予が遼東半島なりとて、即日之を携へ、歸京の途に就きたるも、今は一昔若しくは二昔とはなりぬ。記念の沙礫は、今尙ほ青山艸堂に在り。然も其の記念の意義は、全く當初と異なれり。本來は無念の記念也、今は國運發展の記念也。人の一念程、畏ろしきものはなし、況んや舉國民の一念をや。

(三五) 肅親王

親王中巨擘

肅親王に就ては、多く語る必要なけむ。肅府は、清朝親王中の巨擘也。宛も我が五攝家中の近衛家の如し。

肅親王を訪

予等は午餐後訪問せり、已に豫約ありたれば、直ちに引見せられたり。

應接間には、富士山の掛物と、金梨子地の蒔繪の欄かまに、黄金作りの日本刀を飾り、書棚には、明名臣録、其他奏議類あり、又た卓上には、奈翁の小なる銅胸像を置けり、親王は言語の人にあらずと聞きたれども、其の辭令の妙は、我國の貴人の及ぶ所にあらず、其の動作は莊重也、其の

七〇

親王の風采と動作



肅親王の肖像
 其の容貌は豎に縮み、横に張れり。短軀ながらも、堂々巨人の如きは、此が爲め也。其の顔は長くして、且つ狭からず、上部濶く、中部聊か縮ま

同病の足趾の水蟲

り、下部は更らに開く。若し彼の面相を以て、其の三世相をトせば、彼は他日開運の期なしと云ふ可らざるに似たり。

親王は身體壯健なれども、足趾の水蟲に閉口すと云はれたり。予も亦た同病にして旅行中、尙ほ藥を携へつゝありと答へ、且つ曰く、曾て友人に皮膚病の醫師あり、予が爲めに三日にして全治せしむ可しとて、投劑したるも、寸効なし、予は却て今は賣藥の効能を認むと云へば、親王も語を繼ぎ、藥用は人々によりて相違ありと見え、儂わしにも各所の友人より種々の藥用を勸告し來り、今更ら當惑せりとして、主客相顧みて、呵々一笑せり。

頗る感悚に堪へず

聽て一禮して、親王の自重愛惜を祈りつゝ、辭去す。親王子等を門外階段迄送らる、而して更らに停車場迄、親王自署の寫眞を齎らし、其の第五子君、及び通譯萬羽君とをして、見送らしめられたるは、頗る感悚に勝へざる也。

七一

大正六年十月十日午前六時、大連大和ホテルの客室に於て、方さに北京に向はんとするの當日。

大連より營口

(三六) 滿鐵の評判

滿洲の經營と滿鐵

滿洲の所謂る經營なるものは、從來十中の九分九厘迄が、殆んど滿鐵の施設也。今更稱賛の辭を費す丈が野暮也。蛇足也。贅辯也。

二世間の噂一

併し若し備らんことを求めば、種々の註文ある可し。今ま世間の噂一
二を紹介すれば、(第一)餘りに消極主義に偏し、社員の人氣全く沮喪せり。(第二)幹部に中心人物なく、全く無頭動物也。(第三)上に厚く、下に薄し、故に有爲の社員は逃げ出し、又た新に來る有爲の人物なし。(第四)毎に政變の影響を被る故に、不安の念多し。

他山の石

以上は僅に其一端のみ。予は悉く之に裏書するにあらず。但だ滿鐵の幹部、及當局の君子に於ては、之を他山の石として、採擇して可也。

中村前總裁

有體に云へば、中村前總裁——雄次郎男——は整理屋也。事務家也。其の長所に短所の伴ふは、必然の理也。但だ彼が漸く整理の効を挙げ、積極主義に一廻轉せんとする刹那に於て、都督となりたるは、彼に取りても、滿鐵に取りても、頗る惜む可きに似たり。然も問題は、都督としての滿鐵統裁權が、如何なる程度迄、實行せられ得可きかにある也。其の厚薄、精粗如何は、滿鐵の高等政策に、至大の關係ある可し。予は多言せず、然も今日は、滿鐵が、既往の成功を誇りて、自から満足す可き時にあらず、滿鐵に必要なるは、創業の氣分也。然り、創業の氣分也。

滿鐵に必要なるは創業の氣分

(三七) 大連より營口

十月十日午前十時、大連を發して營口に向ふ。三日朝到著以來、已に一週間を過せり。病の爲めとは申しながら、惜しき日子なりき。

關東州の地味

關東州は如何に最眞目に見ても、地味は貧弱也。但だ海に鹽あり、地下

何となく身は時境に在り



金州南山の遠望

に礦物あり、地の盡くる所、好灣あり、以て聊か其の不足を償ふに足るのみ。而して眞の滿洲の富は、寧ろ關東州以北にある可し。更らに進んで云はゞ、奉天以北にある可し。或は長春以北にありと云ふが、尤も恰當の言ならむ。併しボカ／＼したる小春日和、汽車の窓より打眺むれば、白楊、翠柳の霜風に飽き、疎黄となり、濃黄となり、其の黄葉の林が、海灣の屈曲して、宛も湖水の如き濱邊に沿うたる。豚や、山羊が群を成して、墾圃

の間を逍遙する、小さき舟が、此處彼處に出没する。何となく身は詩境にあり。所謂『扁舟一棹歸何處。家在江南黃葉村。』の句、吾を欺かざるを知る。

沿道變化の著明

熊岳城にて、名産の葡萄一籃を購ひ、大石橋にて、二十分許りの停車時間を利用し、今尙ほ翠色陰々たる楊柳の街を逍遙し、營口に著したるは、午後五時半頃なりき。營口より大石橋、蓋平間の如きは、予は明治二十八年役に於て、徒歩旅行をなしたるもの、今更ら其の沿道の變化の著明なるに驚かざるを得ず。

大正六稔十月十一日午前五時 營口清林館樓上に於て

(三八) 營口の盛衰

營口の見物

十月十一日早朝より、古閑次郎君の案内にて、營口を見物す。二十九年の前遊には、同君と上海に邂逅し、今復た此地にて相逢ふ。因縁なしと

過去繁昌の惰力



營口より見たる遼河

云ふ可らず。概説すれば營口は、其の血液の大部分を、大連に吸ひ取られたり。されば今ま存するものは、衰殘の形骸に過ぎざるが如し。されど(第一)何と申すも、天然の運輸機關たる遼河に枕し、(第二)英人の南滿に於ける根據地たり、(第三)支那商人從來の經營、亦た預りて力なきにあらず。此の如き理由の下に、過去繁昌の惰力と與に、今尙ほ大連に對立せざる迄も、其の地位を保持しつゝあり。されど三十七八年役、軍政時代に、與倉少將が

前途必ずしも失望せず

經營したる新市街の如きも、今尙ほ未製品として残れり。遼河の護岸工事も、老人の齒の抜けたる如く、處々破壊し、之を修理せず。最も目貫の場所たる家屋さへも、空屋少からず。其の依然舊觀を維持するものは、唯だ遼河の濁流滾々たるに支那苦力の雜沓、叫喚あるのみ。されど若し今後、遼河々口浚渫の功を畢らば、營口は尙ほ海運に於て、大連に對して、其の地理の便宜上、幾許の支持力を發揮するを得可し。河運に於ては、固より獨特也。今や本溪湖の鐵も、此處より運送せられ、將來鞍山站の鐵も、恐らくは亦た然らむ。營口の前途必ずしも失望す可らざるが如し。

(三九) 遼東と遼西

滿洲に於ける露英の勢力區域

滿洲の地理を概觀すれば、北流する松花江流域と、南流する遼河流域とによりて、區分せらる。而して從來の行き掛り上、前者には、露國の勢

力注入せられ、後者には、英國の勢力扶植せらる。乃ち營口を起點とし、遼西一帶、山海關に至る迄、今日の所、先づ英國の勢力區域と云ふも、不可なし。

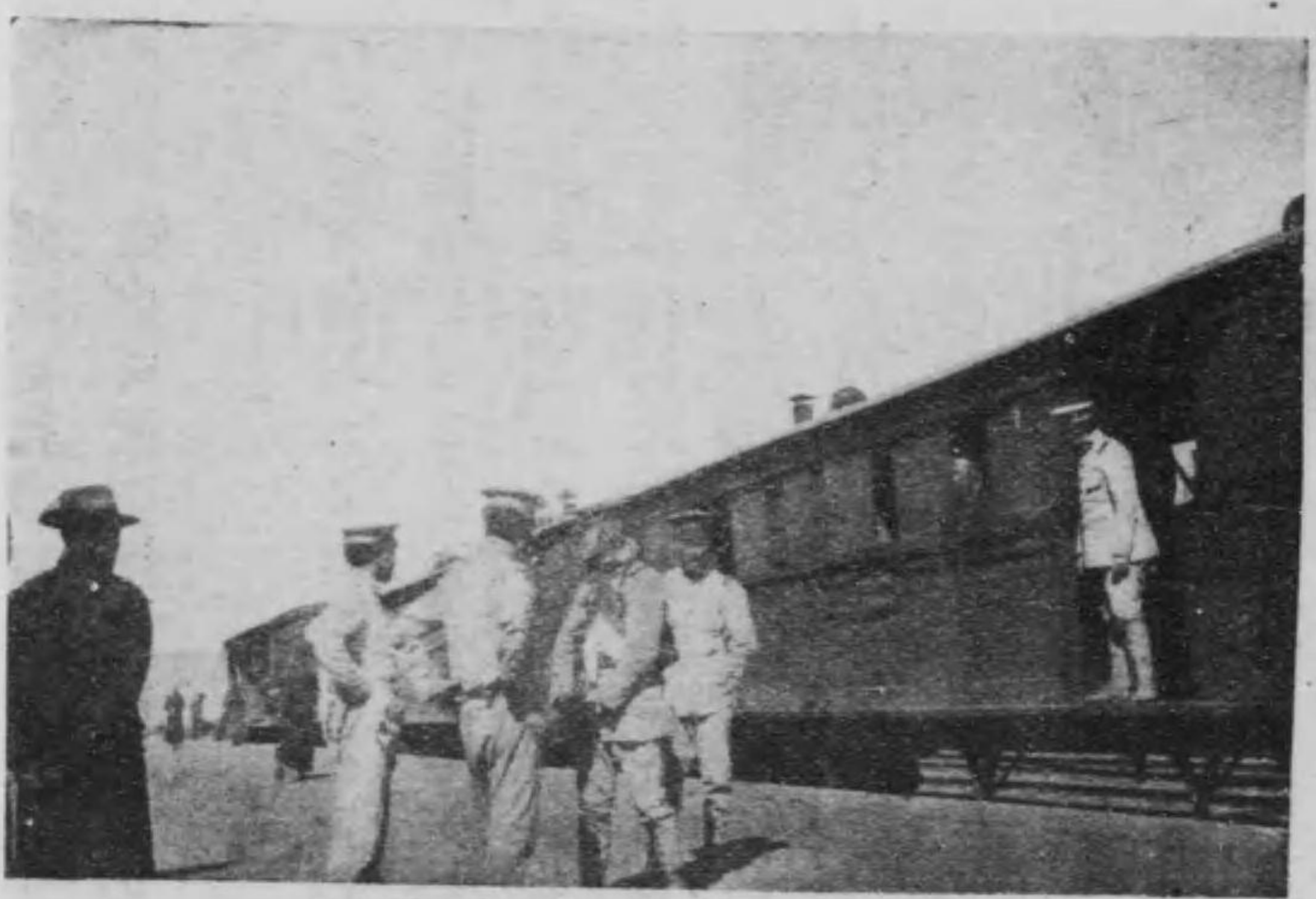
乃ち最も信用ある可き正金銀行、朝鮮銀行の金票さへも、遼河を渡る一步、通用せざる也。否な正金銀行の銀票さへも、通用せざる也。

遼西あるを知らず

我が國民は、遼東あるを知りて、遼西あるを忘れたるにあらざるなき乎。予は小蒸汽にて遼河を下り、河畔より兩岸の光景を眺め、福州、寧波、上海邊より來れる、大なる支那船の碇泊する間を過ぎ、何となく大阪川口を下るの看を倣せり。而して支那戎克の鐵嶺邊より、大豆を輸送し下るもの、今尙ほ鮮からず。遼河は實に南滿に於ける、自然的大動脈也。知らず此の大動脈を、如何にせんとする乎。而して此の大動脈の流域たる遼西を、如何にせんとする乎。

遼西を如何にせんとする

河北停車場
を發す



營口對岸河北停車場

(四〇) 營口より山海關

遼河の右岸なる、河北停車場を發したるは、十月十一日午前十一時半也。是れ京奉鐵道の支線也。此邊一望無際、但だ土地卑濕、鹽分多く、貧弱なる高粱と、葦蘆と、川柳と、而して無名の赭色の草とを見るのみ。溝帮子にて本線に乗換ふ。此の附近に耶律楚材の故居、醫巫閭山あり。往て觀る能はざるを憾む。此れより右窓、山脈に接近して行く。錦州に至れば、唐代の古塔あり。

回々人の饅頭

三十九年會
宿の旅館

此處にて回々人の饅頭を購ふ。回々教徒は豚を喫せず、其の往來する、必らず同教徒の客棧に宿泊すと云ふ。蒸籠に湯氣の騰りつゝある饅頭を満載し、其の側に『西域回々』の四字を書きたる板あり、食指豈に搖かざるを得んや。斯くて午後九時半、山海關に著し、汽車客館に入る。犬吠え、客稀也。一切の設備、大連大和客館ホッパルに比すれば、幽谷に入りたる感あり。是れ英人の經營也。而して是亦た三十九年、予が會宿の旅館也。

大正六年十月十二日午前五時半 山海關汽車客館の寢室に於て

山海關より秦皇島

(四一) 山海關

天氣一變小
春日和

「天下第一
關」の樓上

十月十二日。昨夜の寒風にて、今朝如何あらんと思ひしに、天氣一變、小春日和となれり。廣き長き露臺バルコニーの上に出づれば、庭に蔭する一帯の楊樹は、其の舊翠を改めざる也。庭上の雞頭は、已に半ば凋み、コスモスは、今が盛り也。やがて松昌洋行の連中に誘はれ、南門の上に登り、それより城壁の上を歩し、六角塔の魁樓を廻り、遂に東門の上、乃ち所謂萬里長城の起頭たる、「天下第一關」の樓門の上に躋れり。

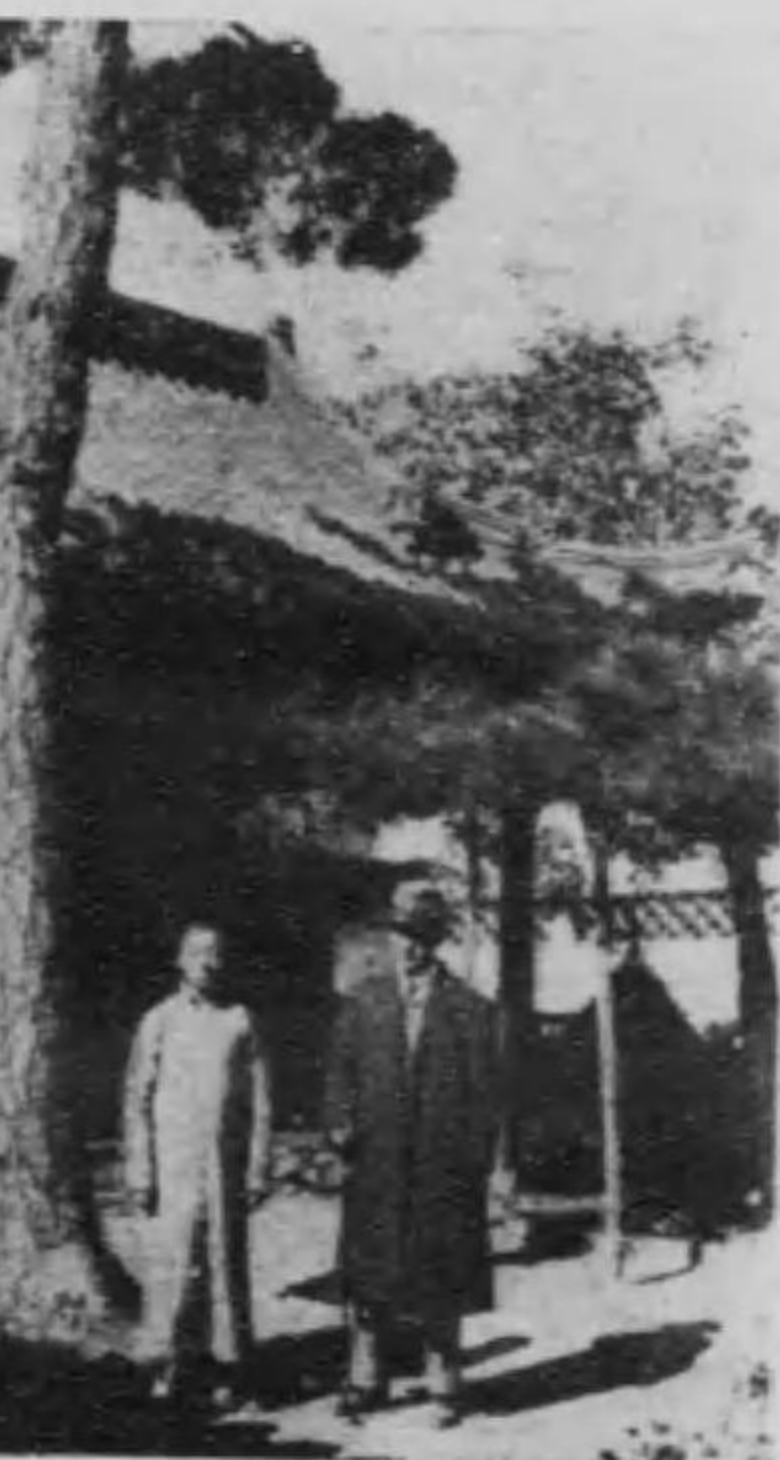
氣霽れ天清し。壁上の側に亂生したる榆樹、柳樹は、極めて輕微なる朝風に戦ぎ、朝露の纒かに啼きたる野菊は、無心に咲ひ、鳥は群をなして翔り、野夫は隊を成し、驢馬を驅り、呂黎—韓昌黎を記憶せよ—の地よ

『關一第下天』山海關内城を望む



『關一第下天』山海關

山海關 道教三清觀



山海關 々教清眞寺

樓上の展望



山海關天下第一關城壁の上蘇峰學人

皇島に碇泊する汽船の烟辨ず可く、北には直隸省の居庸、古北、喜峰の諸山脉、蜿蜒として走りて此に抵り、其の聳ゆる所角山と云ふ。而して其の中腹の窪地に翠色滴るが如き邊、塔堂、樓閣あり。是れ棲賢寺也。而して長城は蛇の如く、龍の如く、蜿蜒として海より延いて、其間を縫ひ

り産する梨や、葡萄を満載して、關門を出でつゝあり。而して山海關市衢の聲は、手に取る如く聞ゆ。樓上より眺望すれば、南には渤海は曙色を帯び、秦

走りつゝあり。更らに西南を望めば、烽火臺とも思はるゝ、塹壘の、巋然として相連るあり。知らず是れ唐太宗の所築の五花城耶。抑々亦大明の中葉以降、倭寇に備へたる烽火臺なる耶。

山河形勢爲誰雄

關頭榆柳戰秋風。長塹如龍劈碧穹。回首中原無管仲。山河形勢爲誰雄。

知らず四萬々の人中、豈に一個の管夷吾なからんや。而して未だ一人の霸才を見出さざるは何ぞや。

(四二) 秦皇島

渤海盡頭唯一の良港

十月十二日午後は、山海關より秦皇島に赴けり。此處は渤海盡頭、唯一の良港にして、且つ不凍港と稱せらる。されど五年に一回位は、凍ることありと云ふ。此港今や、専ら開港礦務局の支配する所となり、開平、灤州の石炭荷積の要港たり。

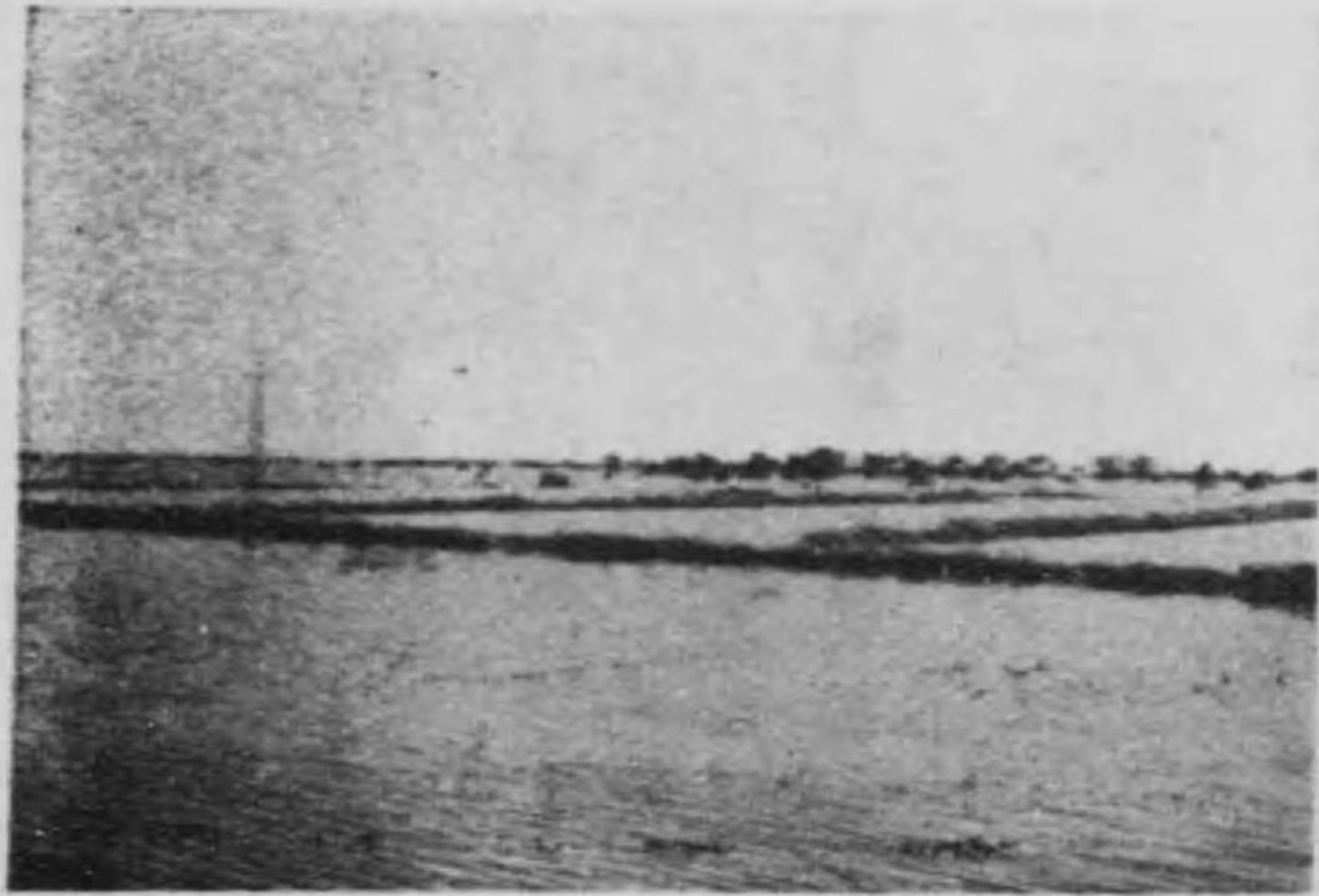
楊樹の上の旭旗



秦皇島外の光景と落日

秦皇島埠頭

新開地なれば、別に見物す可きものもなし。但だ其の良港たるは、素入目にも分明也。埠頭は二個あり、其の大者長さ三百五十呎、其幅三十呎、而して干潮の時、十六呎の深さあり。團匪事件以來、今尙ほ各國の衛兵屯在す。繁れる楊樹の上に、旭日旗を翻しつゝあるは、問はずして我が軍隊たるを知る可し。土地は白沙にして、巉岩盡くる處、乍ち波打際となる。當面の渤海は、靜波天に貼して、一個の眼を遮るものなし。北を顧みれば、連山波濤



天津の流下 白河の氾濫

秦皇島無線電柱



北京正陽門



秦皇島日本守備兵



静寂なる
旅館

の如く、奇峰雲を衝きて屏列しつゝあり。而して西方、山低く海連る所、夕陽漸く下り、其の周邊の空を紫色に隈取り、中心に近くに從ひ、愈々濃厚となり、鮮麗となり、五彩燦爛、血の如く、花の如く、火の如く、錦の如し。宛も是れ一幅御來迎の圖、缺く所唯だ彌陀を見ざるのみ。

予等の宿したる旅館は、休養^{レスト}旅館^{ハウス}と稱し、眞に其名の眇す所の如し。避暑客を當て込みたる旅館にして、今は一人の客なし。極めて静寂なる食堂に、ランプの下に、英國流のロースト・ビーフを喫し、極めて舊式の寢臺の上に、快眠せり。今や又た燭を點じ、本文を草しつゝある也。而して予等は、今夕を以て、方さに北京に入らんとする也。

大正六年十月十三日午前五時 秦皇島休養旅館の寢室に於て

秦皇島より北京

(四三) 秦皇島より北京

秦皇島を發
して昌黎

十月十三日、例に仍りて好晴也。我が兵營と、無線電信所を見舞ひ、午前十時三十八分、秦皇島を發す。昌黎に於て、葡萄一籃を購ふ、此所は菓物の名産地也。今尙ほ韓文公三十七世の孫と稱する者、字を賣りて自ら給すと云ふ。字半紙一枚三十錢。地下の文公、果して如何の感を做す。

沿道と天津
大
水
害
の
表
徴

汽車蘆臺を過ぎて、地概ね沼澤にあらざれば、斥鹵也。此より漢沽を過ぎ、塘沽に至り、始めて白河と近く並行す。此の附近、地上小丘の如きもの、皆な製鹽也。而して所謂る天津大水害の徴は、已に此邊より開展せらる。幾許の土屋は半ば水に没し、電柱は皆な水中に立ち、漁夫は舟に棹して、高粱圃の中に四手網を張る。偶々水なき地に至れば、牛、馬、驢、騾、

北京に直行

羊、豚、雞、犬、皆な群を成し、宛も諾亞の洪水を聯想せしむ。天津に至れば、其の慘狀は、所聞に越えたり、少くとも日本租界の如きは、此が爲めに大打撃を受けたるが如し。予等は北京に直行せり。其の正陽門の停車場に到着したるは、豫定より約一時間後れたる午後九時前十分なりき。仰ぎ見れば、星斗闌干たり、而して北京城壁は巍然として、我を壓するものに似たり。乃ち水門より北京ホテルに入り、姑らく此に行李を安頓す。十二年前には、東道の主人に、島川君毅三郎あり、今や此人亡し、曷ぞ感慨に勝へむ哉。

(四四) 汽車中偶目

京奉線の所感一二

予は京奉線の所感一二を、陳述す可し。汽車の室内は、東清鐵道のそれに比して、先づ清潔と云ふ可き歟。食堂の料理は、滿鐵のそれに比して、總ての點に於て、寧ろ優れりと爲す可し。

食堂内の亂雑には閉口

但だ食堂内の亂雑には、閉口也。四五の外人が、卓を圍み、銀貨を投げ出し、大びらに賭博するあり、それを面白相に見物する、支那人あり。他人に聽えよがしに、大聲にて相互ひに英語を囁り合ふ、支那人の一群あり。予等の食卓にも、一人の支那壯年加はり、無遠慮にも予等の炭酸水を、勝手に飲用しつゝあるが爲めに、玉生君一寸氣を附けたるに、彼は却て威丈け高に、是れ食卓に屬するものと廣言して、更らに幾杯を傾けたり。予等固より彼と争ふを欲せざりしが、彼も給仕に指示せられ、更らに一瓶を購うて辨償せり。然も何等の挨拶もせざる也。若し夫れ葉捲莢を吹かしつゝ、食事するが如きは、尋常の事、固より論ずるに足らず。禮儀三千、威儀三百の國柄には、珍とするに足る。將た停車場の手荷物の揚げ卸に至りては、其の喧争、鷺呼、群雀の竹林に噪ぐが如く、叫天號地、東奔西走、實に不思議と云ふも愚か也。支那人は力を出す前に、聲を出す人種也。

力を出す前に聲を出す人種

十二年前と殊りたるは、車中殆んど、一個の辮髮漢を見出さざること
是れ也。而して又た、婦人の乗客の少からざること是れ也。

大正六年十月十四日午前五時半 北京ホテルに於て

(四五) 西村生

北京に到着して、直に若干の家書、及び社友の書を受取り、始めて東京、
及び内地風水害の甚大なるに驚けり。

西村生死去
の報知

其中に並木淺峰君より、西村生の死去を報ずるの一書あり。予は豫て
期したる事ながら、此が爲めに一夜眠らず、天明に到れり。西村生は、本
年二月迄は、吾社の末班に列せり。彼は予と與に朝鮮に赴く八回、關釜
海峡を往來する十六回。最近三四年、予の往く所、彼必らず從へり。瀬戸
内海航遊に於て、青龍寺銷夏に於て、京都御大典參列の際に於て然り。
其他玉川に、逗子に、概ね予、及び予が家族と與にせり。少くとも予、及び

家族の一人
として遇す

予が家族は、彼を家族の一人として遇したり。彼や孤にして貧、身體羸
弱、然も多少の氣骨あり。精悍にして機敏、忠實にして克く勤む。不幸血
氣の爲めに誤られ、遂ひに痾を抱き、二十四歳にして逝く。彼の死は、予
其の病の爲めに、避く可らざるを知れり。されど死所を得ざりしは、眞
に悼む可し。予は實に彼の爲めに暗涙を飲めり。今茲に一言するは、彼
が平昔の忠勤に對して、酬いんとすれば也。

大正六年十月十四日朝 北京ホテルに於て

大正七稔三月二十日、極めて少數の同人、彼が爲めに追悼の法會を、麻布祥
雲寺塔頭靈泉院に催す。予一詩あり。

紅顏薄命自前緣。 死別生離兩可憐。

一縷香烟凝不散。 孤魂杳渺在何邊。

著 者

北京雜觀

(四六) 紫禁城

通衢大道の改善

北京に入りて、第一に目に著くは、其の通衢、大道の改善せられたること也。勿論一たび横徑に曲れば、舊時の北京を見出すも、其の表向きは立派也。第二には紫禁城の開放也。固より入場料を徴收するも、今は文華殿には、古書畫を陳列し、武英殿には、器、七寶、銅陶器、其他骨董を陳列す。陳列の方法は、秩序的、科學的と云ふ能はざるも、其の品質は、正しく其筋の者には、半日にあらず、半歳を此處の觀覽に費す丈の、價值ある可し。

紫禁城の解放

文華殿の書畫

予等は北京到着の第一日に、公使館訪問後、直ちに東華門を経て、紫禁城に入る。城壁には、彈痕斑々たり、問はずして、張勳復辟當時の記念たる

武英殿の諸寶什



北京の紫禁城

るを知らる。先づ文華殿に入りて、書畫を見る。書は東坡、山谷より、文徵明、董其昌に至り、畫は黃筌、徐熙より、清朝の郎世寧、高其佩等に至る。其の十中の九迄は、乾隆御覽之寶、若くは三希堂鑑賞の御印を鈐せられ、而して其の御題の文字あるもの、亦た少からず。他の事は姑らく措き、書畫の一端に於ても、乾隆帝の功は、没す可らざる也。武英殿には、熱河及奉天の離宮より移したる諸骨董、諸寶器、雜然たり。中にも純金の食器、及び用度品

の夥多なるは、未だ知らず、英國ウインズル宮の黄金の食器と、孰れか其の數量を競ふ可き乎。愛親覺羅氏の盛時想ふ可し。予等は乾隆帝の回疆より虜にし來りたる、寵女香姬の爲めに、特に設けたりと稱する、土耳其風浴堂の跡を見、紫禁城の内濠の大理石の欄干に倚り、夕陽が各宮、各殿の黄甍、丹壁に映じて、赫奕目を眩するの狀にあこがれ、更らに眼を放て、明末崇禎皇帝が、自から縊れたる城内最高點の景山を、落日蒼茫の際に眺め、徘徊禁ずる能はず、漸く門限の爲めに、轉じて中央公園に赴けり。

大正六年十月十五日朝 北京ホテルに於て

(四七) 老柏と新男女

中央公園の
繁昌

中央公園にも、亦た入場料を徴せらる。園は天安門の西側にありて、從來の社稷壇也。予等は濠を隔て、紫禁城に對する、極めて幽淨の邊、老

柏の鬱然として、聳立したる下に立ち寄り、綠茶一杯を喫し、更らに歩を轉ずれば、其の繁昌や、殆んど地は上野にして、人は淺草なるの感あらしむ。道の兩側となく、樹下水邊、何れも椅子を立て並べ、彼處にも此處にも、新らしき男と、新らしき女の群集、何となく北京が一躍して、巴里となりしに、あらずやと疑はる。

老柏と歲寒
の心

所謂る中華民國が、物質的に時々刻々、變化しつゝある状態は、此中に於てさへも看取せらる。而して變化せざるは、園内に猶ほ殘存する、數百株の老柏也。予は此の老柏が、其の老幹古枝を、數百年の風霜、雨雪に打たせつゝ、尙ほ天地を睥睨して、巋然として立つあるを、欽せざるを得ず。所謂る歲寒の心は、唯だ此の老柏と語る可きのみ。

大正六年十月十五日朝 北京ホテルに於て

(四八) 再び文華殿を観る

久振りの雨 十月十六日、今曉夢破るれば、雨聲琴筑の如し。九月二十四日、京城出立以來、初めての雨也。寧ろ此の雨聲がなつかしき程也。

* * * * *

再び文華殿の繪畫を見る

昨日再び、文華殿に陳列せられたる繪畫を見る。平時武英殿の諸骨董は、開館するも、文華殿の方は、偶々三大節に公開し、然も今回は昨日限りと云へば、此の機會は、決して逸す可らざる也。而して予は再來を悔いざりし也。

支那畫研究者の好標本室

一言すれば、只だ此館の一覽の爲めにても、特に東京より來る可き價値ある可し。必ずしも玉石混淆せずと云はず、されど玉の石より多きは、勿論也。宣和御府より、明の文淵閣を経て、乾隆の石渠祕笈に收まりしもの、鮮からず。而して最も多きは、明末の鑑賞家項墨林の舊儲也。概

て精選せられたるものと見て可也。而して其の清時代の畫は、十中八九は、勅命を奉じて畫きたるもの、其の巧拙、出來、不出來は別として、贋作たらざる丈は、確實と云ふ可し。支那畫研究者に取りては、良に好標本室と云ふ可し。

(四九) 乾隆帝の鑑識眼

乾隆帝の無遠慮の捺印

項墨林が、其の愛藏の書畫に、夥多の收藏印、鑑賞印を鈴したるに就ては、後人に異議あり。然るに、乾隆帝に至りては、巨大なる『乾隆御覽之寶』若しくは『古稀天子之寶』の印を首として、所構はず、無遠慮にべたべたと捺するもの、時としては十數顆に上る。而して宋、元名畫の横卷、小幀杯にさへ、捺印は愚ろか、苟も方寸の餘地あれば、御題を筆するもの、時には一再に及ぶあり。是等は書畫愛著の極にして、乾隆帝としては、美德とも云ひ得可し。而して此が却て、書畫の價値を増加する所以と

書畫の一大厄難

も考へ得可し。されど正直に云へば、是れ實に書畫の一大厄難也。文華殿に於ける書畫中には、大小、多少の別こそあれ、十中九迄は、此の厄難に罹らざるものなし。而して其の若干は、已に項墨林の爲めに然せられたれば、再度の厄難と云ふ可く、將た嘉慶帝さへも、先帝に倣うて、捺印したれば、三度の厄難と云ふも不可なし。

如何はしき乾隆帝の鑑識眼

乾隆帝は、老學沈德潜の文章すら、自から駁正したる程なれば、時に偶々項墨林の鑑識を以て、誤れりとなし、鬼の首にても取りたるが如く之を書畫幀の上に、手記したるものもあるも、決して異しむに足らず。然も乾隆帝の鑑識眼も、亦た必ずしも馮據するに足らず。彼は明板の書籍に、宋本の印記を捺し、之を天祿琳琅書目の宋板の部に、登録したるが如き例あれば也。

(五〇) 胡魔化の本性

紫禁城と胡魔化の一例

紫禁城は、袁世凱が、其の帝政を豫期して、修理を施せり。其庭には、白藤樹を植ゑたり。其の黄蕘の散逸したるものは、尋常の瓦を、黄色に塗りて、之を補へり。而して協和門を經文門とし、熙和門を緯武門とし、太和殿を承運殿とし、中和殿を體元殿とし、保和殿を建極殿とし、皆なそれぞれ改稱せり。此の宮城の修理のみにも、無慮二百萬圓を費せりと云ふ。然も其の黄色に塗りたる蕘は、已に剝落して黒色となれり。而して門前の庭は、今尙ほ掃除行き届きたるも、一たび門内に入れば、太和殿前の大理石甃の間には、草や、灌木や、亂生せり。

天壇も亦然

午後天壇に赴く。古槐、老柏、依然として舊時の態を存す。但だ此處も、天壇の石壘の壞目には、セメントを填め、其碧瓦の破損したるものは、皆な尋常の瓦を碧色に塗りて、之を補ひ、而して今や其碧色剝落して、復た黒色となれり。一事が萬事也。袁世凱は、胡魔化を以て始終せり。死者に鞭つは、吾人の屑とせざる所なるも、彼が本性は、端なく此處にも暴

袁世凱の本
性暴露



北 京 天 壇

露せらる。彼は根本的の施設家よりも、一時の間に合せの仕事師たりし也。嗚呼彼の帝政も亦た、權花一朝の夢たりし也。而して今後袁翁に代りて、支那を統一するもの、知らず果して何人ぞ。

大正六年十月十六日天漸く明け、東長安街頭の柳條、雨に垂るるを眺めつゝ、北京ホテルの一室に於て

(五一) 段 總 理

晴運強し

予等は如何に晴運の強きかに、自から驚歎せり。珍らしき夜來の雨も、朝に至りて全く霽れ、道路は天上と與に、纖塵なく、唯だ秋氣の肌に沁するあるを覺ゆるのみ。

* * * * *

段總理を訪問す

即今北京見物には、是非見逃す可らざる一として、段總理祺瑞、馮總統國璋を數ふ。予等も其例に漏れず、訪問せり。談話の筋は、今茲に縷記す可き必要もあらず。

取締りの殿

段總理は、醇親王の攝政王として、清朝の最後に執掌せられたる邸を、占めつゝあり。即ち今は國務院の官舎也。予等は十五分間に、三回待合所を移されたり。門より入りて、家を踰え、庭を踰え、又た家を踰え、廊下を踰え、又た門を踰え、庭を踰え、凡そ一町餘もある可し。取締りは何れ